



SRI SATHYA SAI RAM NEWS

LOVE ALL SERVE ALL HELP EVER HURT NEVER

No.216 / 4月号 / 2023



CONTENTS

- サイの御教え
「人生を実りある有意義なものにさせなさい」
「本当の時間割」
- サッティヤム・シヴァム・スンドラム
- Sri Sathya Sai Baba 様
ご生誕100周年記念ヴィジョン
「ある霊性修行者の選択」
- ワカ チンナ カタ
- 帰依者体験談
- サイと共に
- 活動報告：スタディーサークル

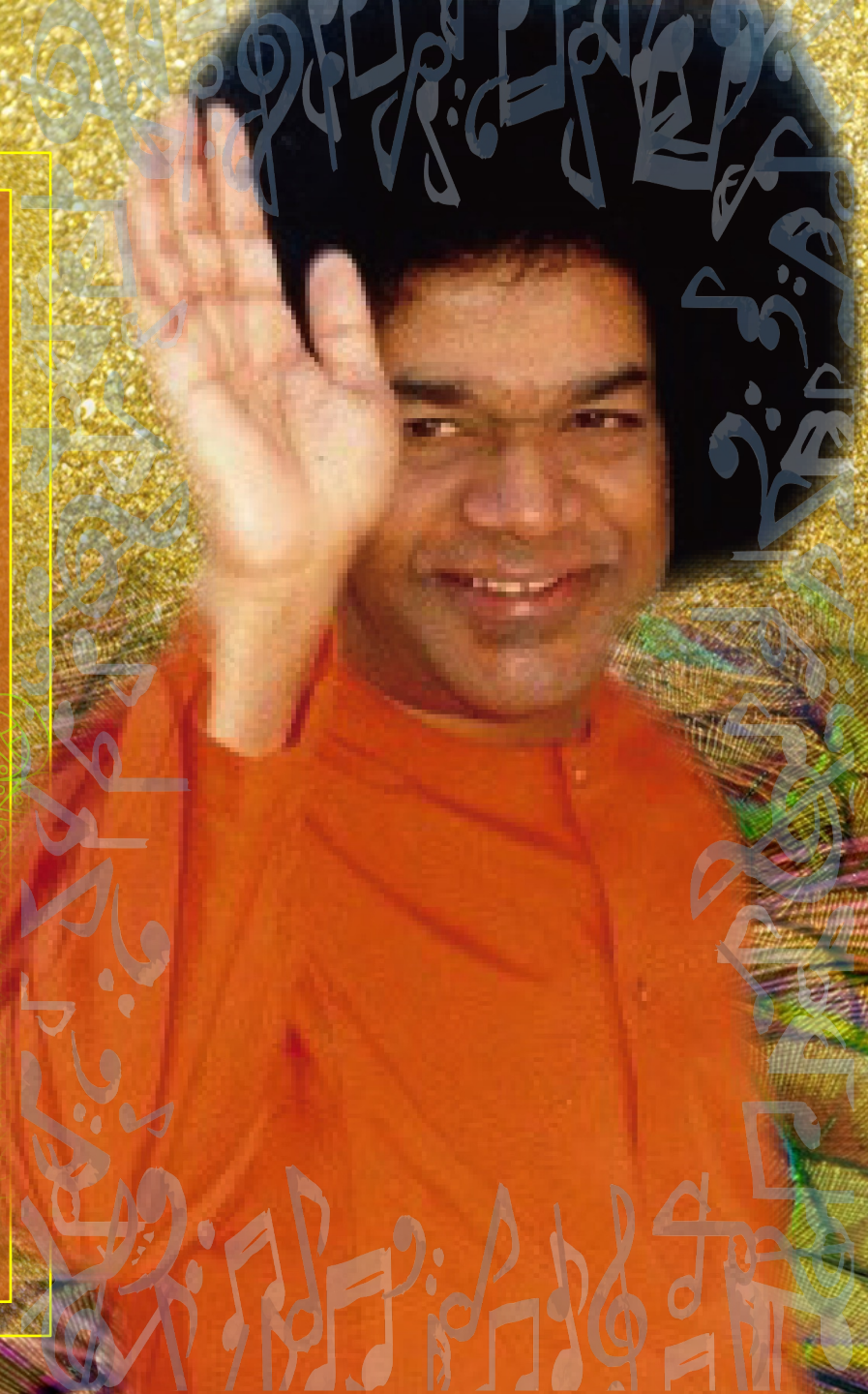




サイの御教え

人生を実りある
有意義なものに
させなさい

1999年10月17日の
ババの御講話



ブラフマーナダム、パラマスカダム、
ケーヴァラム グニャーナムールティム、
ドヴァンドヴァーティータム、
ガガナ サドルシャム、
タットワマッスヤーディ ラクシヤム、
エーカム、ニッティヤム、
ヴィマラム、アチャラム、
サルヴァディー サークシブータム、
バーヴァティータム、トリグナラヒタム、
サッドグルム

〔神は、ブラフマンの至福の体現者であり、
この上ない歓喜を与える者、
究極なる叡智の具現であり、
二元性を超え、大空のようであり、
タットワマスイという大格言によって示され、
一つであり、永遠であり、
純粹であり、不動であり、
理知のあらゆる働きを目撃者であり、
あらゆる心の状態を超越し、
三つの属性を持たない、
真のグルである〕

愛の化身たちよ！人はヴェーダの神秘と内的意味
を理解するために高潔な性質を養うべきです。
ヴェーダで使われている用語は時間と空間の壁を越
えています。

「ブラフマーナダム」（ブラフマ アーナダ）という言葉を考えてみましょう。これは永遠の至福を意味します。こうした言葉は、物質的な快樂から得られる喜び（ローカ アーナダ）と比較することによって理解することはできません。「ブラフマ」という語は、広大さを意味する語根「ブリハト」から派生したものです。ブラフマ アーナダは、変わり得ないものです。それは真の無限の至福です。それはまた、一つであるという体験から生じる至福を意味する、アドワイタ アーナダ〔不二の至福〕と呼ぶこともできます。それはまた、ニルグナ アーナダ（姿形を超越した至福）やニラーカーラ アーナダ（属性を超越した至福）とも表現されることもあります。

「パラマスカダム」とは、至高の幸福を意味します。これは世俗的な幸福や五感の快樂とは何の関係もありません。それは永遠の至福の体験と同じものです。

「ケーヴァラム」とは、時間と空間と状況の制限を超越したものという意味です。

「グニャーナムールティム」は、英知の人という意味です。ここでのグニャーナとは、一つであるという体験のことです。それは体と心（マインド）と知性を超越しています。「アドワイタ ダルシャナム

グニャーナム」（不二一元の体験は真の英知なり）。

人間がこうした類いまれな英知を理解することなどできるでしょうか？ ヴェーダには、こういった神聖な意味に満ちた言葉がたくさんあります。神という、無属性で、古来よりの、永遠で、常に新しく、清らかで、汚れていないものだけが、ヴェーダの原理の内なる意味を説明することができます。

「ドヴァンドヴァーティータム」とは、幸せと悲しみ、善と悪、功德と罪など、あらゆる二元性を超越したもののことです。

「トリグナラヒタム」とは、三属性であるサットワ〔浄性〕、ラジャス〔激性〕、タマス〔鈍性〕を超越したもののことです。属性は姿形と結びついています。ですから、姿形のないものには属性がありません。ヴェーダには4つの大格言（マハーヴァキヤ）が含まれています。それらは、ブラグニャーナム ブランマー（智慧はブラフマンなり）、アヤムアートマ ブランマー（このアートマはブラフマンなり）、タットワマスィ（汝はあれなり／汝はそれなり）、アハムブランマースミ（私はブラフマンなり）です。無属性の原理は、これら4つの宣言さえも超越しています。

「エーカム、ニッティヤム」とは、永遠で、無二

のもののことです。ヴェーダは、「エーカム エーヴァ アドヴィティーヤム ブランマー」（神は唯一無二である）と宣言しています。「オーム イッティエーカ アクシャラム ブランマー」（一音節のオームはブラフマンなり）。

「ヴィマラム、アチャラム」は、清らかで、安定しているもののことです。この宇宙では、太陽、月、惑星などの天体は常に移動しています。映画館のリール〔フィルムの一巻き〕は1秒間に16コマという高速で動いているということを現代の学生たちは知っていると思いますが、心（マインド）の動きの速さは推し量れないほどです。それほどまでに揺れ動く心には、神という、安定し、変化せず、無属性であり、最高の至福と幸福を体現しているものを理解することは不可能です。だからこそ、古代の聖賢たちは、「究極の幸福の権化であるお方に敬礼いたします」と祈ったのです。体や心と結びついた幸福は、まったく幸福ではありません。内なる幸福（ニヴリッティ）こそが、真の幸福です。

神だけが永遠の至福を与えることができる

神の原理を理解することは非常に困難です。神性を経験するためには信仰心が非常に重要です。信仰心があるところには、愛があります。愛があるところには、平和があります。平和があるところには、

真理があります。真理があるところには、神性があります。神性があるところには、至福があります。ですから、神性だけが永遠の至福を与えることができるのです。世俗の幸福は一時のものです。これに関連して、アーディ シャンカラ〔初代シャンカラ〕はこう述べました。

マールダナ ジャナヤンヴァナ ガルヴァム
ハラティ ニメーシャート カーラハサルヴァム
(若さ、お金、子孫を誇ってはならない。
それらは一時のものにすぎない)

世俗の幸福は惑わしであり、五元素や五感と結びついています。それは外への道(プラヴリッティ)に通じるものです。

人間の体は5つの鞘(コーシャ)でできています。食物の鞘(アンナマヤ コーシャ)、生気の鞘(プラナマヤ コーシャ)、心(マインド)の鞘(マノマヤ コーシャ)、理智の鞘(ヴィグニャーナマヤ コーシャ)、歓喜の鞘(アーナンダマヤ コーシャ)です。体は食物の鞘です。体を動かしているのは生気の鞘です。生気の鞘の先には心の鞘があります。人間が調べられるのはこの3つの鞘だけです。人間には理智の鞘と歓喜の鞘を理解することは不可能です。なぜなら、人間は五感に縛られているからです。

五感には究極の真理を理解することができない

ブッディ グラーヒヤム アティーンドリヤム、すなわち、五感には究極の真理を理解することができない、と言われていています。どんなに知的であっても、内なる道を歩まなければ真理を理解することはできません。同一の体が、起きている状態、夢を見ている状態、深い眠りの状態という3つの状態すべてにおいて存在していますが、ある一つの状態であなたが見たものは他の状態では見ることはできません。なぜなら、それらは外への道につながっているからです。真理を理解するためには、外への道を捨てて内への道をとる必要があります。

この体が7歳のとき、プッタバルティの小さな村で、コレラやペストといった恐ろしい伝染病が猛威を振るいました。恐れをなした親たちは、子供が家の外に出るのを許しませんでした。けれども、子供たちは、私を愛するがゆえに、親に告げずに私のところにやって来ました。全員が6歳から8歳の年齢層の子供たちでした。

ある日、12人近い男子が私の周りに集まってきて、不安そうな口ぶりで言いました。

「ラージュ、僕らの村でコレラやペストが流行っていることが分かったんだ。とても危険で、命にかわるんだって。僕たちはどうなるの？」

私は言いました。

「どんなに予防したとしても、体はいつか滅びるものだ。だから、死ぬことを恐れてはいけない。神さまを黙想して、病気に打ち負かされないように気をつけるんだ」

少年たちは、どのような神の姿を思い浮かべたらいいかと私に尋ねました。彼らは皆、とても純真無垢(じゅんしんむく)でした。当時、ここは人口106人のとても小さな村でした。彼らには自分たちはどのような神の姿を崇拝すべきなのか、考えもつかなかったのです。



スワミが病気を追い払った方法

ランプを灯し、それを夕方6時にバザールに置いてバジャンをするようにと、私は少年たちに言いました。彼らはどんなバジャンを歌えばいいのかわかりませんでした。そこで、私は彼らのためにバジャンをいくつか作りました。私は彼らに言いました。

「外に神さまを捜す必要はない。神さまは僕たちの中にいるんだ。黄土色の服を着て、足に鈴輪を付けて、手に持ったターラムをたたきながら村を回って、怒りと欲望という悪い性質を取り除くんだ」

当時は、夕方5時を過ぎると誰もサティヤンマ寺院の先に行く勇氣はありませんでした。なぜなら、その先は村から遠く離れていて、寺院の敷地の境界を越えた所には幽霊が出ると信じていたからです。

私は、幽霊も魔物もないと言って自信を与え、神の御名を唱えることでコレラやペストの病気を追い払うようにと助言しました。私たちは、足に鈴輪を付け、ターラムを鳴らしながら、チットラーヴァティー川の川床までバジャンを歌いながら歩いていきました。3日間という短い期間でコレラやペストを根絶してくれたのは、神の御名でした。

両親は子供たちを私のところに連れてきて、疫病から救ってくれたことに感謝の意を表しました。彼らは言いました。

「ラージュ、君が子供たちに勇気と自信を植え付けてくれたことに恩を感じている。子供たちは学校ではなく君のところに行かせる。どうか子供たちが幸せになるのに必要な教育を与えておくれ」

毎日、夕方6時になると、子供たちは私の家に集まり、夕食をとった後、授業を受けました。子供たちは、私を「授業の達人」と呼んでいました。彼らの両親は、グル ダクシナー〔師への謝礼〕として3パイサの月謝を出したがりましたが、私はきっぱりと断りました。子供たちは毎夕、数字やアルファベットを学ぶために私のところに来ていました。それらの学びを全面に出しながら、私はその中に価値教育を組み込んでいました。悪い仲間に入らない、批判や中傷にふけられない、良い習慣と良い性質を身につける、親を敬い親の言うことをきく、といったことを私はよく助言していました。以降、子供た

ちの行動や考え方に明らかな改善が見られました。

スワミのバジャンを作る才能

月夜の晩には夕方6時にチットラーヴァティー川へ行き、ようやく戻ってくるころには夜の11時になっていました。年長者も数人付いてきて、カバディ〔南インド発祥の国技〕などをして過ごしていましたが、子供たちはやりたがりませんでした。私が何度言っても、子供たちはそうしたゲームに加わろうとしませんでした。それよりも、バジャンや私のそばにすることに興味があったのです。子供たちは、私にバジャンをリードしてほしいと頼むこともありました。このようにして、私たちはチットラーヴァティー川でバジャンを歌って過ごしたものです。子供たちはよく、新しいバジャンや歌を作ってほしいと頼んできました。彼らは私をべた褒めしました。私は子供たちに、何か望みがあれば言ってほしいけれども、私を褒めるのはやめてもらいたいと言っていました。

ある日、コッテ・スッバンナという名の薬剤師が、カマラープラムからプッタパルティにやって来ました。彼は私の作曲の才能についていろいろなことを聞き、新しい薬の宣伝になるような歌を書いてほしいと頼みに来たのです。彼はスッバンナのところにやって私のことを尋ねました。スッバンナは言いま

した。

「ラージュのことはよく知っていますよ。彼は村一番の良い子です。性格も行いもお行儀も良い子です。それだけでなく、他の子たちにも良いことを教えています」

ある日、スッバンナはコッテ・スッバンナを昼食に招きました。昼食をとっている時、彼は私の作詞作曲の腕前について疑問を口にしました。私のような小さな子供が市場で新薬が売れるような歌詞を書くことができるというのは信じがたいと、彼は言いました。そこで私は、ならば誰か自分が信用できる人のところへ行ったほうが良いと言って、彼を追い返しました。

私は子供たちに大きな愛を注いでいました。ケーシャンナ、ランガンナ、スッバンナ、ラマンナは、私が毎晩河原に連れて行っていた子供たちです。彼らの純真無垢、清らかさ、そして、私への愛は、言葉ではとても表現できません。ある7歳の少年は、とても疲れているように見えるから少し休んだほうが良い、自分がひざ枕をするからしばらく横になってほしいと、私に言いました。その様子を見て、他の子供たちもひざ枕をする特権を得たがりました。そこで彼らは、全員平等にチャンスが与えられるような方法を考え出しました。それは、全員が一人ずつ順番に私の頭を膝に乗せ、1から50まで数を数え終わったら次の子供に交代するというものでした。

全員が私に奉仕する機会を逃すことなく、私は全員を満足させました。

スワミは薬を宣伝する歌詞を書く

ある日、コッテ・スッバンナが再び私のところにやって来て言いました。

「ラージュ、この子供たちはみんな君の指示に従う心積もりだ。みんな歌がうまくて、声もいい。どうか私の新しい薬を宣伝する歌をいくつか作って、この子供たちにそれを歌って村中を回るように言ってくれないか。報酬を払う用意はできている」

私は彼に言いました。

「僕はギブ・アンド・テイクの商売は好きではありません。この子供たちもそれを認めません。とにかく、その薬はどんなものかを正確に教えてください。それに応じた歌を作りますから」

彼は、その薬はバラ・バースカラという名前で、いろいろな病気を治すことができると説明しました。私はその薬の効能をテルグ語のきれいな歌にしました。

さあ、子供たち、おいで、

新しい薬、バラ・バースカラが出たよ。

胃の痛み、消化不良、栄養失調、手脚のむくみ、

いろんな病気に効くすごい薬だよ。

その薬はコッテ・スッバンナの店で手に入る。

かのシュリ・ゴーパーラチャルヤ先生が作ったすばらしい強壯剤だ

コッテ・スッバンナはこの歌詞をととても気に入り、広告用にそれを大きな紙に書かせました。彼は運がよかったのか、私は5学年と6学年の授業をカムラープラムで受けることになりました。コッテ・スッバンナは、私のカムラープラム滞在を薬の宣伝のために最大限に活用しました。

アーンジェネーヤはスワミが寺院でプラダクシナーをすることを止めた

私は、幼いころから、子供たちにとってインスピレーションの源でした。他人を傷つけることは避け、自分の義務を誠実に遂行するようにと、私は子供たちに力説したものです。マーガ月〔西洋の暦の1月から2月〕には、朝4時に子供たちをアーンジェネーヤ（ハヌマーン）寺院に連れていきました。中には幼い子もいて、そんな早い時間には起きられませんでした。そこで私は、その子供たちを近くの池まで連れて行って沐浴をさせ、それからお寺に連れていっていました。子供たちがプラダクシナー（御堂の周りを時計回りに歩く礼拝）をしている間、私はお寺で座っていました。

ある日、子供たちが、私も一緒にお寺を回るべき

だと言い出しました。私はとうとう彼らに負けて寺院を回りはじめました。すると、信じられないかもしれないかもしれませんが、アーンジェネーヤがやって来て、こう言って私が寺院を周るのを止めたのです。

「おお、主よ！ 私のほうがあなたの周りを回らなければならぬのです！ そんなことはなさらぬでください」

一方、子供たちはアーンジェネーヤを普通の猿だと思いました。私は子供たちに、アーンジェネーヤがやって来て、私がお寺を回ることを許してくれないのだと言いました。

この事があってから、子供たちのハートに大きな変化がありました。子供たちは、アーンジェネーヤ寺院で目撃したことを村中の人に話して回りました。そのニュースはカラナム・スッバンマにも届きました。

翌日、彼女はこう言って私を家に招きました。

「ラージュ、今日はドーサをこしらえたので、食べに来なければいけませんよ」

当時、イドリーやドーサといったものは、お金持ちの食べ物だと考えられていました。私はスッバンマは子供たち全員のためにドーサをこしらえてくれました。

サットウィックな料理の必要性

村人たちは、私に相当な尊敬の念を持ちました。プッタパルティの人々が生まれて初めて神のことを考えるようになったのは、サティヤ・サイ・ババのおかげです。それはしだいに他の村にも広がっていききました。私はよく村人たちに、非菜食、お酒、喫煙を控えるよう、熱心に勧めていました。そして、サットウィック・フード〔浄性の食物〕の必要性を強調しました。

エーカーダシーのお祭りには、チットラーヴァティー川の河原で牛車（ぎっしゃ）レースが行われていました。速く走らせるために牛を鞭（むち）で打つのが常でした。私は子供たちに、自分の父親に牛を鞭打つのをやめるよう要求するようと言いました。今だけでなく、当時でさえ、私は非暴力の原理を説いていたのです。

当時、村では闘鶏が盛んでした。雄鶏（おんどり）の脚に小さなナイフをくくり付け、どちらかが死ぬまで闘わせるのです。その過程で、もう一羽の鶏もひどい怪我（けが）をしていました。私は村人たちに、人は善行を競うべきであって、そのような残酷な行為を競うべきではありませんと言いました。

いつも良いことをしている人は決して評判が悪くなることはない

ある日、この体の父親であるペッダ・ヴェーンカマ・ラージュが、村のことには口を出さないようにと、私を叱りました。彼は、年長者のほうが物事をよく知っているのだから、度を越してはいけな、と言いました。私は、もし動物が殺されたり、不当に扱われたりしたら、黙っているわけにはいかないと言いました。彼は、私を納得させることができなかったので、この体の母親に助言をさせました。食事を出している時、彼女は私に言いました。「サティヤ、お父さんの機嫌を損ねるようなことをしてはいけません。お父さんの言うことを聞かないと、村で悪い評判が立ちますよ」

私は、自分は良いことをしているのだから人の言うことは気にしないと行って反論しました。私は、いつも良いことをしている人は決して評判が悪くなることはない、と強調しました。この体の祖父であるコンダマ・ラージュも、私の主張を支持してくれました。彼は村人たちを呼び、私のやっていることは村のためになると言ってくれました。彼も、暴力や賭博を慎むようにと村人たちに助言しました。そして、まとまりがないと村は険悪になる、と戒めました。こうした教えのせいで私への憎悪を募らせた人たちもいました。

私は、学校の授業に出るために朝7時までにブッカパトナムに行く必要がありました。先生方は私をとてても可愛がってくれました。どの先生も、教室に入ってくると開口一番、「ラージュは来ているか？」と尋ねました。当時の私はどのようなか分かりますか？ 私たちの家は貧しい家でした。今の子供たちのように何十着も服を持っているわけではありませんでした。シャツと膝下丈のズボンが一組あるだけでした。学校から帰るとすぐに服を脱いで洗濯し、腰にタオルを巻いて服を干しました。そうやって、一組の服で一年間やりくりしていたのです。

平安が私の本質、愛が私の本性

学校で質問されたときには、私はいつもうまく答えることができました。他の生徒の多くは、質問に答えるのが苦手でした。同級生の中には25歳近い大人もいて、ほとんどがドーティーを着ていました。私はクラスで一番年下でした。ある日、私が問題にうまく答えると、メーブーブ・カーン先生に、怠けている生徒たちを叩きなさいと言われました。彼らのほっぺたに手が届くようにするには、机の上に登らなくてはなりません。私は彼らのほっぺたを優しく叩きました。すると先生は、「私は君に、顔にターメリックを塗れと言いましたか？ どうやればいいのか、私がやって見せよう！」

プッタパーティに戻る途中、何人かの生徒が私を押して川の砂地に転げさせ、私の両足を引きずりました。彼らは私のシャツを裂き、私を泥の中に投げ込みました。そのようないじめを受けていた間、私はずっと平静を保っていました。平安が私の本質です。愛が私の本性です。平安はスワミの姿です。至福は私の決意です。

私はハヌマーン寺院にたどり着き、服を洗って着直しました。学生諸君はその時の私の状態を容易に想像できるでしょう。シャツが破けていても、布を留める安全ピンすらありませんでした。それを買うお金もありませんでした。誰かに頼む気もありませんでした。私は誰にも何も求めません。この決意を、私はその日から今日までずっと守り続けています。私はサティヤンマ寺院に行ってサボテンのとげを抜き、それをピン代わりにしてシャツの裂け目を留めました。もし、本気で自分の決意を守り続けていれば、どんなことでも成し遂げることができます。

あるとき、スッバンマが私に言いました。「ラージュあなたは弱ってきています。よく食べて、丈夫になりなさい」。友人たちは、家でこしらえたものを何でも私のために持ってきてくれました。でも、私はこう言っていました。「君たちの家では肉や魚を料理して食べている。そういう家からは何も持ってこないでほしい」。このようにして、私はプッタ

パーティの非菜食を減らしたのです。同じようにして、私は闘鶏や牛車レースといった動物への虐待を抑え、賭博の習慣も妨げました。

私たちが真実を守れば真実が私たちを守る

あるとき、私に敵対する者たちが、私が寝ていた部屋に火を放ちました。その時、外のベランダでは6歳から9歳の子供たちが10人ほど寝ていました。悪党たちは私の部屋に外から鍵をかけ、屋根に火を放ちました。子供たちは大声で、「ラージュ！ ラージュ！」と叫んでいました。私は小さな窓から笑顔を見せて言いました。

「怖がることはないよ。ダルマ エーヴァ ハトール、ダルモー ラクシャティラクシタハ（ダルマを滅ぼせば滅ぼされ、ダルマを守れば守られる）。僕たちが真実を守れば、真実が僕たちを守ってくれる。この教訓を固く信じるんだ」

子供たちは目を閉じて、「ラージュ！ ラージュ！」と、それがあたかもマントラであるかのごとくに唱えました。屋根は藁（わら）でできていたので、大火事になりました。すると突然、大雨が降りだして、火はすっかり消えてしまいました。土砂降りになったのはその小屋の上だけで、他の場所には降りませんでした。子供たちの喜びようといったらありませんでした。「ラージュ、ラージュ、すご

い奇跡だ！」と子供たちは叫び続けました。「君がいなかったら僕たちは生きられないよ」。私は彼らを家の中に呼び入れて、グアバとバナナをあげました。子供たちは、この果物はどこから持ってきたのか尋ねました。私は言いました。「どうして気にするの？ もらったものを食べればそれでいいんだよ」。大きな屋敷であろうと、道端の避難所であろうと、それは問題ではなく、眠れればよいのです。それと同じように、お腹がいっぱいになれば、それでよいのです。

スッバンマのスワミへの愛

スッバンマは翌日この出来事を知りました。スッバンマは偉大な魂の持ち主でした。スワミは彼女の命そのものでした。スッバンマは犯人を見つけるために綿密な調査に乗り出しました。犯人は捕まりました。スッバンマは彼らを村から追放するよう命じました。村の財産はすべてスッバンマが所有していました。スッバンマはとても裕福でした。すべての土地はスッバンマが所有していました。だから犯人たちに、自分の土地から出て行くようにと命じたのです。そこで、私は彼女の両手を握って言いました。

「どうか私のために彼らに危害を加えないで。知ってか知らずか、彼らは過ちを犯してしまいました。どうか許してあげて。どうか追い出さないで」

スッバンマが犯人たちにそのことを話すと、彼らは皆スワミのところにやって来て、スワミを肩に担ぎました。スッバンナやラマンナといった人たちがいました。彼らはとてもプライドが高い人たちでした。そんな彼らが、私を肩に担いで言ったのです。

「君は前世でどこかの偉人であったに違いない。そうでなければ、これほどの気高さはありえない。君のおかげで、この村は次第に高い評判を得るようになるだろう」

スッバンマは言いました。

「彼を小さな少年だと勘違いしてはいけません。彼の力は落雷と同じです。どうしてあなた方に彼の本性を理解できるでしょう？」

その日から、スッバンマは私が外出するのを許しませんでした。私はスッバンマの家において、そこから学校に通いました。スッバンマは立派な女性でした。当時、彼女は60歳でした。彼女はいつも私を探していて、「ラージュはいる？ ラージュはいる？」と聞いていました。スッバンマは私が無事であることを確かめてから眠っていました。スッバンマは村の悪人から私を守ろうとしていたのです。

毒入りの食べ物でスワミの命をねらう

ある日、一人のブラフミンの女性がやって来ました。彼女はスッバンマに、家でスナックをごちそうしたいのでラージュを来させてほしいと頼みました。

スッバンマはその提案をあまり快く思いませんでした。スッバンマは不審に思い、この招待の裏には何か邪悪な意図があるのではないかと勘ぐりました。スッバンマは申し出を断り、私に言いました。

「ラージュ、私の承諾なしにはどこにも行ってはいけませんよ」

私は言いました。

「スッバンマ！ どうしてあの人の願いの邪魔をするの？」

スッバンマは答えました。

「この招待の裏には何か悪い目的があるのよ」

しかし、私は反対して言いました。

「僕はあの人の願いをかなえなければ」

私はその場所に行きました。その女性はヴァダ〔豆粉の生地をドーナツ形にして揚げた南インドのスナック〕を作っていました。それは毒入りでした。私はそれを食べました。5分も経たないうちに、血液に毒が周って全身が真っ青になりました。それを知ったスッバンマが私を捜しに走ってきました。スッバンマが私を見つけたとき、私は言いました。

「心配しないで、あの人たちは、自分がしたかったことをしたのです。僕の面倒は僕が見ます」それから私はスッバンマに、コップに水を入れて手渡してほしいと頼みました。その水を飲むと、すぐに青みは消えました。スッバンマの怒りは限界に達していました。

「このような女たちはプッタパルティの評判を落とします。この村にはそんな人たちの居場所はありません。ここには正しくて気立ての良い人だけが住むべきです」

スッバンマはスワミの仲間たちの母親を呼んで言いました。

「〔今日から〕この子たちは皆さんの子ではありません。皆、私の子です。この子たちは、いつもラージュと一緒にいるべきです。すべての時間を一生ラージュと一緒に過ごすべきです」

最近まで、彼らは生きていました。諸君は皆、ブッカパトナム・サティヤナーラーヤナを知っているかもしれません。彼もそのうちの一人で、今も私たちと一緒にここにいます。彼は六年生の時の級友でした。その子たちは皆、スワミの所にやって来ました。スワミに対する彼らの汚れなき愛情、信愛、愛着を説明するのは難しいことです。カリユガは子供たちの心をむしばんでいます。

当時、スワミが眠くなって伸びをすると、その子たちの間で、誰がスワミの膝枕をするか競争が始まったものです。彼らは言いました。

「ラージュ、君が僕の膝の上で眠ってくれたおかげで、僕の体はどこも痛くない、僕は何だか喜びでいっぱいだ」

現代の子供たちも同じような気持ちになるとよい

のですが。

「私は何も求めません。私はギブ アンド ギブのみです」

今、子供たちの心は正しくない感情でいっぱいです。「ヤッド バーヴァム タッド バヴァティ」（心のありようが、その人のありようとなる）。当時の子供たちは、とても清らかで純真無垢でした。スワミはその時、村人たちのためにそれらの性質を広める決意をしました。

単なるバジャンや、「ラーマ」、「ゴーヴィンダ」と唱えることは、偉大なことではありません。良い習慣を身につけなさい。模範的な性質を身につけて、良い評判を得るべきです。スワミは、学生諸君がああ学生は良い性格だという評判を得たら、嬉しく思います。子供たちの振る舞いは、スタートから良いものであるべきです。だから私は、「早くスタートし、ゆっくり運転し、安全に到着しなさい」と言うのです。もし、若い年齢から神聖な習慣を身につければ、模範的な人間に成長します。私と一緒にいた人たちは、今でも村々の輝く手本であり続けています。スワミがバンガロールから戻る途中に私を見ると、彼らは沿道一帯で「スワミ！ スワミ！」と言って大喜びで挨拶をします。車で私の後を付いてくる人たちは、彼らが瓶に水をくんで運んで持っ

てきて、道路を洗っている様子を知っています。彼らは言います。

「スワミ、あなたは私たちのために水を運んでくれました。私たちはあなたに水をお返ししなければなりません」

私が彼らに「元気ですか」と尋ねようものなら、彼らは歓喜に満ちます。私が一銭もお金を蓄えないのは、この変容のためです。私は1パイサの財産も持っていません。私の全財産は私の学生です。私は何も求めません。私はギブ アンド ギブ、与え、与えるのみです。スワミのギビング（与えること）に限界はありません。帰依者は、何かを与えることによって、幸せにならなければいけません。スワミの唯一の関心事は帰依者たちの福利です。誰も私の福利について心配する必要はありません。私の福利は私の手の中にあります。ですから、真実と正義から離れることなく人生を送るなら、その人の人生は実りある有意義なものとなるでしょう。

1999年10月17日

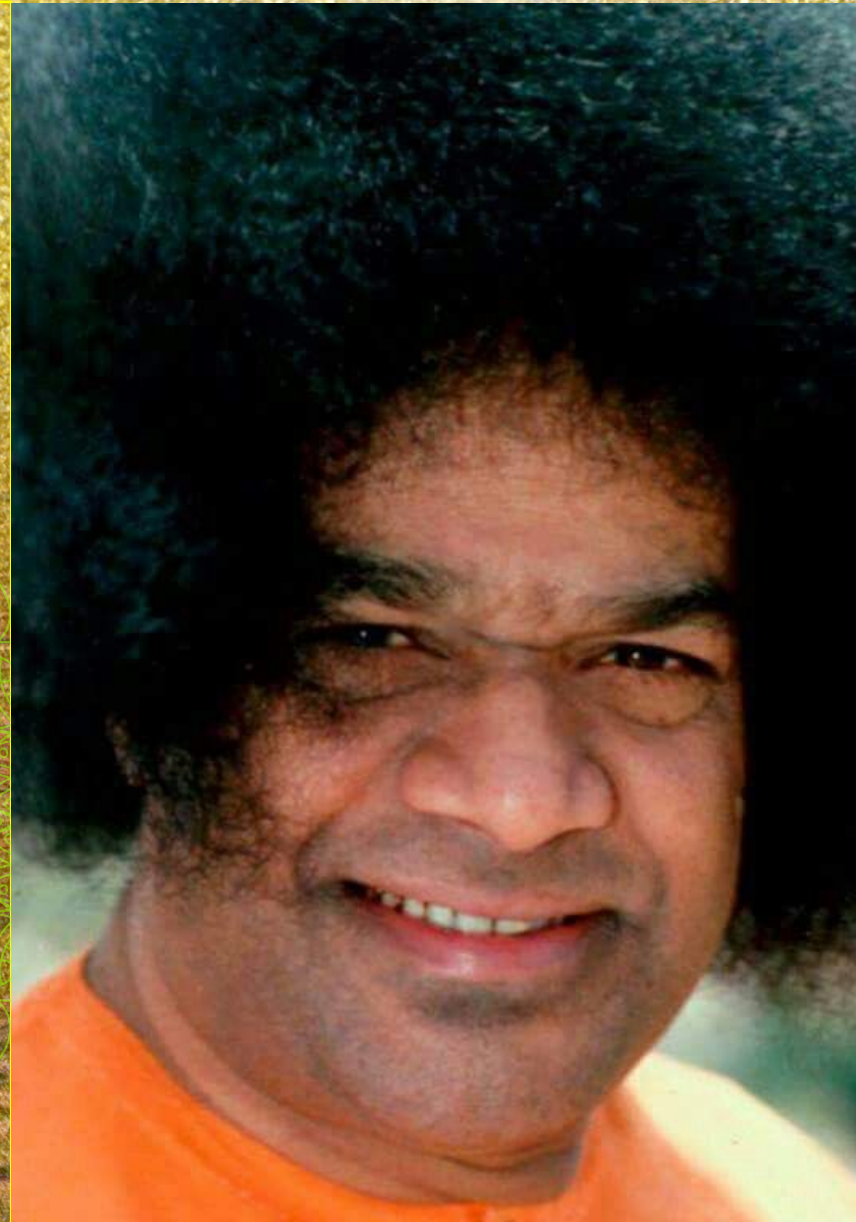
プラシャーンティ・ニラヤムにて
Sathya Sai Speaks Vol.32 part2 C10



サイの御教え

本当の時間割り

1969年ダシラー祭の
ババの御講話 7



人は「創造されたもの」に捕らわれて、自分は神聖な創造主の一部であるという事実が見えず、自分が包まれている肉体の鞘と自分を同一視して、すべての存在は一なる普遍的な絶対者の中で万物と一体であるということが見えていません。人は、霊的な規律や発見について無数の文章を書き、研究していますが、弁証法的な対立や議論に興じて混乱を悪化させてきました。しかし、そうした書物の少なくとも1ページか2ページを実践した人は、名声や勝利への欲望を持つこともなく、沈黙しています。その人は自分の奥底で幸せを感じています。その人は内なる畑を耕して愛の種を蒔き、それが不屈の花を咲かせてシャーンティ（平静）〔平安〕として結実します。これはこの国〔インド〕のリシ〔聖仙〕たちのメッセージです。

どの人にも、修正すべき3つの誤りがあります。それは、「垢」（あか、マラ、汚れ）、「注意散漫」（ヴィクシェーバ）、「覆い」（アーヴァラナ、隠蔽）です。「垢」というのは根本的な無知（アグニャーナ）のことで、それが10人目の人に10人目の人はいないと言わせるのです。（自分以外の他の9人だけを数えて自分が10人目であることがわからないこと）こうした無知すなわち「垢」は毒気であり、それが「覆い」を生み出します。「注意散漫」とはその無知の影響のことであり、それが、見当たらない人〔10人目〕を10人全員に川の中で探させるの

です。

「垢」は現世と前世のカルマの結果〔行為の応報〕です。「垢」はニシカーマカルマ〔無欲の行為〕（行為の結果として生じる利益や損失に執着せずに行為をすること）によって取り除くことができます。「覆い」の影響は、サハナ（寛容）とアンニョーニャヤタ（互いのものであるという感覚）を培うことで克服できます。10人が相互の連帯感で結ばれていれば、誰も行方不明だとは思われなかったでしょう！同様に、「注意散漫」もプレーマ（愛）によって克服することができます。愛は、一人ひとり全員を本人以外の人に明らかにすることができ、誰も「見逃される」ことにはならなかったでしょう。これは、アーナンダ（至福）を身につけるための方法——愛と献身と奉仕の方法です。

決して人に火傷を負わせたり傷つけたりするような表現を用いてはならない

完結へと導くために、他にもできることがあります。例えば、真実に忠実であることです。

マナッ サッティエーナ シュッダヤテー
——真実によって心（マナス、マインド）が
清められる

真実は偉大な浄化装置です。真実は、汚れも罪も、欠陥も偽りも認めません。偽りは、嘘を語る人の舌、それを聞く人の耳、そして、それを舌から耳の鼓膜まで運ぶ空気を汚します。音には有益なものと邪悪なものがあり、それらは空気中にその反響音を生み出します。神への信仰心とそれが育む謙虚さから発せられる言葉は空気を清らかにしますが、虚栄心から発せられ、ニヒリズムや無神論によって罵倒する言葉は空気を汚染します。

空気をきれいにするような音声だけを使いなさい。辛辣であってはなりません。決して人に火傷（やけど）を負わせたり傷つけたりするような表現を用いてはなりません。そのような表現は憎悪と慢心の悪しき産物です。主を讃え、主の栄光を語りなさい。それはあなたと他の人々に課せられた義務です。

このヤーガ〔供儀〕が存在する理由は、ヴェーダの音はすべて神を讃えるものであり、ヴェーダが伝統的な学派で定められているとおりに正しい調子〔スワラ〕で唱えられるとその場の空気は確実に著しい変化を遂げ、その空気を吸った人の中に存在する悪が以前よりは少し減るからです。神への信仰心は、自分自身と他の人々に徐々に信仰心を染み込ませ、それによって世界はもっと幸せになるでしょう。

アメリカ人は月面を歩き、ロシア人は火星でピク

ニックをするかもしれませんが、両者とも共通の故郷である地球に戻らなければなりません。ラーマヤナで、シーターにラーマとの再会の望みを捨てさせるために、あるときシーターの前にラーマの首が差し出されたのを皆さんは知っていますね。同様に、ラクシャサ（羅刹／悪鬼）たちはシーターの首をラーマの前に掲げ、ラーマに生きたシーターを取り戻す望みを捨てさせようとした。首はどちらも相手をだますために用意された偽物で、本物ではありませんでした。それと同じように、人は、死んでいる衛星ではなく、生きている星、つまり、チャンドラ（月）ではなく、ラーマチャンドラという主——内なる衛星、内なる惑星、内なる動機や動揺を支配する主——に到達して、初めて真の勝利を主張することができるのです。

人の活動の本当の時間割り

人の内面の反応や動揺が神聖なものに変換されると、人が感官と心（マインド）と知性を通して経験するすべてのことが神聖な輝きを帯び、それらの神聖な核心が明らかになって、その人は愛の姿に形作られます。このヴィジョンが得られれば、人は世の中にいながら世の中に影響されずにいることができます。そうになると、すべての行いは、全能の神のために、神の恩寵によって、神の意志を通して行われるようになります。

家で、料理人や使用人や子守などに仕事をしてもらってはなりません。女性は、子供の世話や夫の世話を彼らに頼ってはいけません。そうした使用人のおかげで瞑想（ディヤーナ／坐禅）のための暇を得たとしても、靈的に得るものはありません。神への礼拝の行為として、すべての家事を行いなさい。そうすることは、家事という貴重な仕事を、お金を払って雇うお手伝いさんに任せることで手に入れる瞑想の時間よりも、実り多いものなのです。

男性も、一つのむなしなものから別のむなしものへと飛び回り、昼夜を過ごすためのさらに意味のない方法を探して貴重な時間を浪費するのは、人生の主な目的にとって害であると感じなければなりません。喜びを広げ、力を与え、勇気を配り、悩んでいる人を慰め、足の不自由な人の歩行を助け、目の見えない人の目となる——これが人間の活動の本当の時間割りです。母なるインドは、子供たちがこれらの理想を捨て去り、礼拝される神としての権威の座をエゴに与えたために、物乞いの国に成り下がってしまいました。

私たちはここで、サティヤ・サイ・オーガニゼーションの役員の方の全インド大会を開催していますが、それは、彼らワーカーたちがこのメッセージをもう一度思い出すためです。ペトロマックス〔圧力式灯油ランタン〕のランプが暗くなったら、中に空気を

送り込むと明るくなります。ここにいるランプたちは暗くなりがちなので、私たちは彼らをサットサンガ〔善人との親交〕のためにこの場所に呼び、彼らの内にインスピレーションと指示を送り込むのです。そうすると、彼らのバッテリーはさらなる奉仕のために再び充電されるのです。

インドは、常に高潔な人格者の側に立ち、警戒心を持って完璧に維持されています。そうした揺るぎのない強固な人格を伴わない学識やシッディ（ヨーガの力による技能／スィッディ）などの成果は、喜びを生むことのできないプラスチックの果物のような、まやかしの模造品です。心（マインド）が神の栄光と神の御名を唱えることに従事しているときには、狂った欲望の坂道に迷い込ませる誘惑は存在できません。1日2回、朝と夕に時間を割いて、舌が甘さを味わう時のそれぞれの御名の深い意味を十分に認識しながら、同じような考えを持つ人たちと一緒に全員で声を合わせて神の御名を歌うなら、自分の内にも外にも神は常に存在しているという気持ちを定着させるのにすこぶる役立つでしょう。

サティヤ サイ ババ述
ダシヤラー祭（ナヴァラートリ祭）
ブラシャーンティ ニラヤムにて
1969年10月19日
Sathya Sai Speaks Vol.9 C27



サッティヤム シヴァム スンダラム 5

第49回

時が経つにつれ、バガヴァンのところに集まる会衆はとて多くなり、どんな帰依者の家でもバガヴァンのダルシャンを求めて訪れる群衆を収容することができなくなりました。大勢の帰依者たちは、日差しや雨をものともせず、バガヴァンが滞在なさる家の外の道路に集まりました。その光景はバガヴァンの優しい心を動かし、バガヴァンは町の郊外にある静かで落ち着いた場所にアシュラムを作ることを決意なさったのです。

1958年1月1日、ババは、町の東方20キロにある小さな町、ホワイトフィールドを訪れ、何人かの帰依者たちと共に、たわわに実った果樹園で丸一日を過ごされました。

ホワイトフィールド周辺にアシュラムを設けるといふババのサンカルパ〔意志〕は、1959年7月23日で伸びに現実となりました。バガヴァンは、町の北

方まている幹線道路の東側に20エーカーの屋敷を購入なさいました。バガヴァンは、1960年7月25日に正式にその場所に入られ、そこを「ナンダナ・ヴァナム」と名付けました。その名のとおり、そのアシュラムは「喜びの庭」であり、「ナンダの神なる息子の庭」でした。何百本もの木に飾られた長方形の土地には、おびただしい数の鳥のさえずりが響き渡っていました。北側には木々に覆われた小丘があり、まるで天国のような所でした。その庭の中央には、小さいけれども魅力的なバンガローがありました。他には、その敷地にある建物は、南西の角に位置する正門に隣接した離れだけでした。ババは1961年の終わりまでずっと、その町を短期間訪れた際には「ナンダナ・ヴァナム」に滞在なさっていました。



主が滞在された「ナンダナ・ヴァナム」のコテージ

アーンドラ・プラデーシュ州の雲母王として知ら

れていた、シュリ・ゴーギネーニ・ヴェーンカタ・スッバイフ・ナイドゥと彼の家族は、「ナンダナ・ヴァナム」の北方5キロにある13エーカーの土地、「モーハン・パレス」を所有していました。そこは鉄道のホワイトフィールド駅のそばに位置する良く計画されたエリアで、広大なバンガローがあり、たくさんの泉や池、手入れの行き届いた植物園の数々に囲まれていました。曲がりくねった一本の並木道がバンガローから敷地の北西角地の正門まで続いていて、道の両脇にはたくさんの花を咲かせる木々が立ち並んでいました。敷地に入ると、右手に巨大なインド菩提樹、左手に屋根付きの通廊で繋がれた瓦屋根の二つのコテージが目に入ります。その場所全体が、畏敬の念を抱かせるような所でした。バガヴァン・ババという神聖で力強い磁石は、そのアーンドラ・プラデーシュ州出身の有名な雲母産業の有力者をナンダナ・ヴァナムへと引き付けました。父親と、その三人の息子、シュリ・ヴェーンカターシュワラ・ラーオ、シュリ・セーシャギリ・ラーオ、シュリ・モーハナ・ラーオは、ババの帰依者となりました。ババも彼らの家を何度か訪問なさいました。三兄弟は、1961年9月に父親が逝去すると、プッタパルティを訪れて、バガヴァンがバンガロールに来るときは必ず自分たちといっしょに「モーハン・パレス」に滞在してくださいとお願いしました。ババは彼らの愛に満ちた申し出を受け入れ、1962年の夏を三兄弟と共に過ごされました。並木道の木々の下

でのダルシャンのために、素晴らしい準備がなされました。三兄弟から帰依者たちに提供された愛情のこもったもてなしは、バクタヴァツァラー〔バクタを愛する者〕であるバガヴァンを喜ばせました。ババへの信愛とババの帰依者への愛情によって強く促された三兄弟が「モーハン・パレス」をババに捧げたいと言ったとき、ババはそれを受け入れられました。その一方で、ババは三兄弟に「ナンダナ・ヴァナム」を受け取るようにと強く主張なさいました。それはババから三兄弟への愛のこもった贈り物でした。サイ・ゴーパーラは、その新しいアシュラムを「ブリンダーヴァン」と命名なさいました。それは人々に、バーラ・ゴーパーラ、神なる牧童の、聖なるリーラー・ブーミ〔神聖遊戯がなされた土地〕を思い起こさせるものでした。

三日間に及ぶ式典は、1964年4月13日のアシュラムの落成式で幕を開けました。そこには景観に配慮した18か月かけた改築が多数施されていました。その日は、クローディという新年の始まりと、ヴァサンタ・ナヴァラートリ〔春の九夜祭〕の初日という、二重におめでたい日でした。落成式には、インド国内外からの何千人という帰依者以外にも、卓越したヴェーダ学者たちや有名な芸術家たちなど、大勢のお歴々が出席しました。その時から、ブリンダーヴァンはアヴァターが半年間ほどを過ごされる第二の家となりました。当初、ブリンダーヴァンの主、

サイ・クリシュナは、男女が別れて並木道の両側に座っている所を行ったり来たりしながら、ダルシャンを与えておられました。後に、生い茂った菩提樹の木の下で、毎週日曜日と木曜日にバジャン会が行われるようになりました。有名なトリバンギ〔首、腰、膝の三箇所をそれぞれ違った方向にS字に曲げる姿〕のポーズでたたく美しいヴェーヌゴーパーラの大理石の像の前にある大木の巨大な幹を囲むように設けられた円形の台の上に、バガヴァンは座られました。ブリンダーヴァンを訪れる帰依者の数が増えると、その木の下に金属製の薄板の屋根が付いた円形のマンタップ〔祭場〕が作られました。それは、「サイラム・シェッド」とか「サイラム・マンタップ」などと呼ばれました。そのアシュラムには、徐々にさらに多くの設備が帰依者たちのために付け加えられていきました。

ブリンダーヴァンの黄金時代は、男子大学である、シュリ・サティヤ・サイ・カレッジ・オブ・アート・サイエンス・アンド・コマースの開校と共に始まりました。ブリンダーヴァンの地は、バガヴァンとバガヴァンの学生たちの間にある何よりも美しく甘美な間柄によってもたらされた、新しいオーラを得ました。そこは現代におけるグルクラ〔師と弟子たちが共に暮らし学ぶ学びや〕となりました。そこにはクラパティ〔クラの主〕の近くで愛に満ちた生活を共にする学生たちがいました。1970年から1980

年の10年間、バガヴァンは一年の大半をブリンダーヴァンで過ごされ、自らの「青年男子たち」を親身になって育て上げられました。その幸運な学生たちは、バガヴァンから顕示される素晴らしい神の力に畏敬の念を覚え、バガヴァンから注がれるあふれんばかりの蜜のような愛によって心を動かされ、変容したのでした。ブリンダーヴァンの夏は、「インド文化と霊性に関する夏期講習」に参加しようという国中から押し寄せる何千人という大学生たちであふれ、忙しさが増しました。プラシャーンティ・ニラヤムとブリンダーヴァンの双方でバガヴァンの近くにいる機会を享受した帰依者たちは、「プラシャーンティ・ニラヤムはババの仕事場、ブリンダーヴァンはババの家庭。ババは、プラシャーンティ・ニラヤムではシヴァ神で、ブリンダーヴァンではクリシュナ神だ」と言っていました。



ブリンダーヴァンの旧マンディールにて

シュリ サティヤ サイ ババ様 御生誕100周年記念ヴィジョン



ハートの中におられる神様を絶え間なく憶念し
人類同胞愛という一体性の花を捧げます



ある霊性修行者の選択

SSSIOJ会長 住友正幹

一人の真面目な青年がサイ オーガニゼーションを離れていきました。スワミの話をする時は「スワミが、スワミが・・・」と嬉しそうに話していたのですが・・・。

いろいろな悩みも話されていましたが、スワミの御教えを守れないので会員としての資格がないと自責の念にかられているようでした。

霊性の道を歩もうとすれば、誰もが自分の出来の悪さや至らなさに直面させられます。

スワミは、

「感覚をコントロールしなさい」

「欲望に制限を設けなさい」

「いつも助けなさい」

「誰をも傷つけてはなりません」

「すべての人を愛しなさい」

「すべての人に奉仕しなさい」

「あなたの生き方が私のメッセージになるように」
など多くのメッセージを発していらっしゃいます。

果たして自分はそのようなサイの御教えを守っていけるのだろうか・・・？サイの帰依者などと呼ばれる資格が自分にはあるのだろうか？サイの道を歩む者として相応しいのだろうか？

真面目な人ほど、このような理想と現実の狭間で葛藤するのでしょうか。

その方は、自問自答の末にサイオーガニゼーションを離れ、別の道を歩まれることになりました。どんな道を歩もうとも、その道がその人にとってはきっと必要なのだと思いますし、どんな道を歩んでも神様が見守っておられますので心配はしていませんが、残念な結果になったことを覚えています。

スワミは御教えを守ることを決して強制されているわけではありません。

スワミは次のように説かれています。「宗教の分野ではいかなる類の強制も強要もありません」（1983年10月30日の御講話より）

またスワミは、フォース（強制）ではなくソース（源）だと言われています。ソース（源）とは、私たちの源である内なる神のことです。

つまり、一人ひとりが内なる神聖意識に照らして行動する自主性が大切であり、誰かから強制されるものではないということなのでしょう。サイオーガニゼーションもそのように何かを強制することは決してありません。

ですので、スワミの御教えを守れなければ会員と

しての資格がないなどということはないのです。「御教えを守れなかった」と思えばやり直せば良いのです。完全な人間などいませんし、誰でも間違ふこともあります。しかし、そのような助言をしてもその方の決心を翻すことはできませんでした。

スワミは次のように説かれています。

「人々が霊的で有益な活動を行うよう求められるとき、最初からやる気のある人は一人もいません。それでもやはりやけになってはなりません。分別が芽生えるまでは、厳しく規律を守りなさい。この分別が修行の成果なのです。最初のうちは誰一人としてそれを持っていません。しかし絶えず訓練することが熱意を生み出します。乳児は母乳の味を知りません。毎日母乳を飲むことによってそれを好きになり始めるのです。実際、その味がとても好きになるので、母乳を止めて代わりにご飯が与えられるようになると、最初は嫌がります。しかし母親は諦めません。毎日少量のおかゆを食べるように促し、そのうちに子供はご飯を好むようになって、最終的に断乳するのです。乳児にうってつけの食べ物だった母乳は、自然なやり方で、今度はご飯に取って代わられます。実際、今度は一日中ご飯がもらえないと、子供は悲しくなります。同様に、絶えず修行していると、世俗的・感覚的な事物に対する欲望は薄れていき、良い仲間（サットサング）が主流となるでしょう」（バーガヴァタ ヴァーヒニー第1章より）



何ごとにも根気強さが大切です。たとえ御教えを守れない時があっても諦めるべきではありません。そのような時には良き仲間（サットサング）が大きな力になってくれるはずです。

仏教には、出家した者が戒を守れそうにない時に「捨戒の便法」というものがあるそうです。これは戒を犯す前に一時的にその戒律を捨てるというものだそうですが、真意には深さがあるようで、今日は捨戒したから般若湯（お酒）を飲むことにするなどと言いつにやるものではなさそうです。

しかし「捨戒の便法」という言葉があるということは、古来より出家者でさえいろいろと悩み、葛藤してきたことを物語っているように思われます。

この世に神の御教えや戒律を完全に守れる人はどれほどいるのでしょうか？人間である限り、内なるジハードを続けながら、勝利した日や敗北した日があるのが普通なのだと思います。

この勝利感も敗北感も、私が行為者であるという行為者意識が生み出すマーヤー（幻想）だと思えますが、そうだとしてもそれらを否定する必要はないでしょう。

なぜなら、私たちは体験を通してこそ学び成長することができるからです。敗北感や悲嘆などの否定的な感情も肯定的に受け止めることが求められます。

ただし、自責の念や否定的な感情は行為者意識が

生み出すマーヤーだと知っておかないと自己嫌悪に陥りますので注意が必要です。

私たちは、私という個人が存在し、個人の自由意志で生きていると錯覚していますが、真実から見れば、すべては神により動かされているはずで、スワミは言われます。「草の葉一枚といえども神の意志なくしては動かない」

ただし、この見解はアドワイタ（不二一元）という究極の真理であり、行為者意識に縛られている私たちは、自分の行為の責任を取らなければなりません。その理由につきましては、ダイアナ・バスキンが「サイ ババの聖なるレッスン」の中で「自由意志」について言及されていますので、ご参考にしていただければと思います。

いずれ靈性修行者が究極の段階に達することになれば、すべてが神様のご意志により動いていることが分かるのではないのでしょうか？そのことを頭の隅においた上で、現状を俯瞰し、自分を責めることなく、根気よく靈性修行を続けることが大事なのだと思われます。

ジハードとは：

ジハードは、『（クルアーン（コーラン））』に散見される「神の道のために奮闘することに務めよ」という句のなかの「奮闘する」「努力する」に相当する動詞の語根 jahada（ジャハダ、語源としており、アラビア語では「ある目標をめざした奮闘、努力」という意味である。

（ウィキペディアより、2023年1月29日）

ダイアナ・バスキン：

著者のダイアナを光に導いたのは、その母親でした。母親は初めてのインドの旅で出会った神人、バガヴァン・シュリ・サティヤ・サイ・ババについて語り、満たされずにいた娘を霊的に励ましました。娘のダイアナは、母親の言葉を信じてインドへ向かい、現代のアヴァターにめぐり遭う幸運に恵まれました。2度目にインドを訪れた際、ダイアナは5年間アシュラムに滞在して、バガヴァンの神性を体験し、その御教えを学び、バガヴァンに従うことができました。バガヴァンに出会う前は混乱状態にあったダイアナの人生は、神のお導きによって見知らぬ相手と結婚した時に転換しました。これはすべて、彼女の最初の本である『追憶－サイ・ババとの聖なる日々』の中に書かれています。

自由意志のリンク先：

http://www.sathyasai.or.jp/mmg_cnt/202302/freewill.pdf

ワカチンナカタ

師と弟子



ラーマクリシュナ・パラマハムサは、彼のアシュラム〔修道場〕に4、5人の弟子を持っていました。弟子たちは毎日、食料や花や衣類、その他の必需品を買うために交代でカルカッタ〔コルカタ：インド西ベンガル州の州都〕へ出かけたものでした。カルカッタへ行くには、渡し船で川を渡らなければなりませんでした。

ある日、ブラフマーナンダ〔ラーマクリシュナの弟子〕がカルカッタへ行く番になりました。ブラフマーナンダは船に乗り、静かに隅のほうに立っていました。船の中には数人の乗客がいました。サンニャースィン〔行者〕を日頃から軽蔑していたある男が、ブラフマーナンダに向かって言いました。「あいつを見てみる。なんとたくましくて強そうなんだ。しかし、それが何の役に立つ？ あいつは何の仕事もせずに、ただ食べて寝ているだけだ。あいつのアシュラムには、あんな奴がごろごろしている。若者たちを甘やかすあのグル〔ラーマクリシュナ〕のせいだよ」。すると、そこにいた人々が一齐に声をあげて叫びました。「そうだ！ そうだ！ あいつらも誰の役にも立たない役立たずどもだ」。それを聞いて、ブラフマーナンダの心は傷つき、苦痛を覚えました。「私たちの師について、彼らが一体何を知っていると言うのだろうか？」と、ブラフマーナンダは思いました。彼は静かにその侮辱に耐えました。ブラフマーナンダは生まれつき内気な性格だった

め、言い返したり、やり返したりすることはできなかったのです。

夕暮れ時になり、ブラフマーナンダは買った物を持ってアシュラムに戻りました。ラーマクリシュナは、外の世界での経験について弟子たちに詳しく尋ねるのが日課でした。そうすれば、弟子たちの外界での振る舞い分かるからです。ラーマクリシュナはブラフマーナンダに尋ねました。「さて、今日はどんなことがあったかね？」ブラフマーナンダは率直にその日の出来事をすべて話しました。ラーマクリシュナは怒りました。「何だと！ お前は自分の師の悪口を言われたのに黙っていたのか？ お前はきちんと言い返すべきだった。このアシュラムにお前のような者の居場所はない」

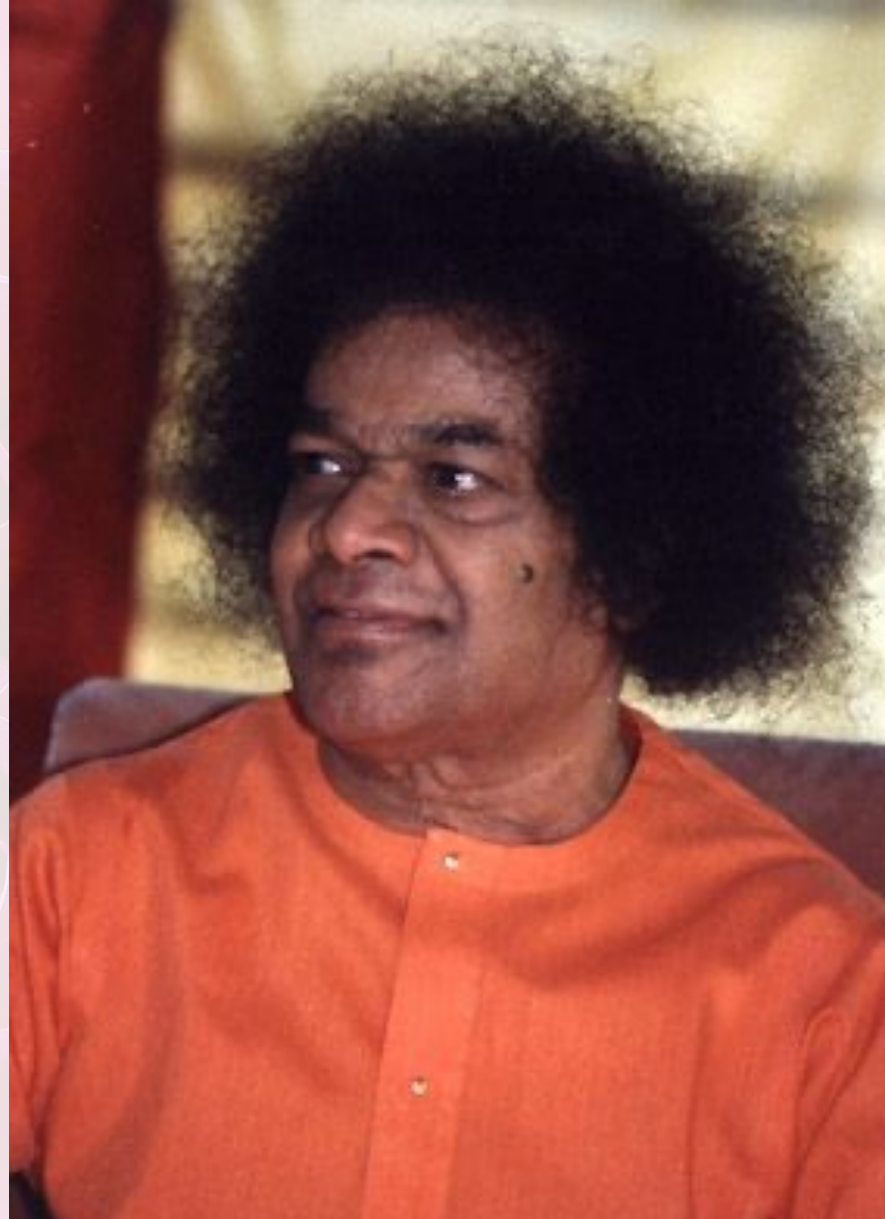
ヴィヴェーカーナンダは、ブラフマーナンダの話から師の叱責までの一部始終を聞いていました。

翌日は、ヴィヴェーカーナンダがカルカッタへ行く番でした。彼は渡し船に乗り、そこにいる人々の顔を注意深くうかがっていました。昨日、ラーマクリシュナを侮辱したのと同じ紳士が、ヴィヴェーカーナンダを指差して言いました。「ここにもう1人のパラサイト〔寄生者〕がいるぞ。こいつらは皆、あの無学なバラモン僧を崇拝しているんだ。なんと愚かな若者たちだろう」。ヴィヴェーカーナンダは

その男に近づき、右手を高くあげて言いました。

「我々の師に逆らうようなことをもう一言でも口にすれば、お前を川に投げ込んでやる。気をつけろ!」。それを聞いた船頭は恐くなり、その男にもう何も言わないよう忠告し、男の耳元でささやきました。「あの若者は、きっと本気で言ったことをやるぞ。気をつけないと皆がトラブルに巻き込まれる」

その夜、ヴィヴェーカーナンダは師の前に呼ばれました。ラーマクリシュナは、「さて、何か変わったことはあったかね?」と尋ねました。ヴィヴェーカーナンダはたいそう興奮して、その日の出来事をまくし立てました。「何だと!」と、ラーマクリシュナは叫びました。「お前はサンニャースインの衣をまとっていながら、サンニャースインとして振る舞っていない。よくもそんな短気を起こしたもんだよ。このアシュラムにお前のような者の居場所はない」。ヴィヴェーカーナンダは師の足元にひれ伏して言いました。「師よ!あなたは昨日、ブラフマーナンダが言い返さなかったことをお叱りになりましたか? 私が敬けんな弟子として自らの務めを果たしたのに、なぜお怒りになるのでしょうか? どうかご教示ください」。ラーマクリシュナはヴィヴェーカーナンダの背中を優しく叩いて言いました。



「愛する息子よ、あの助言は、ブラフマーナンダのように臆病で内気な者のためにあるのだ。

ブラフマーナンダはもっと勇ましくなければいけない。お前に関しては、威勢がよすぎる。お前はもう少しおとなしく、穏やかになるべきだ。自分の弟子に、それぞれの性質と気質に応じた助言を与えるのはすべてのグルの務めだ。私は、お前にもブラフマーナンダにも、少しも怒ってなどいないのだよ」



『ワカ チンナ カタ』とは「ある小話」という意味のテルグ語で、ババ様が御講話の中で話された、たとえ話や物語です。



帰依者体験談

奇跡は信心を深めるための 名刺代わり

Bro. 田村克弥：金沢グループ

オーム シュリ サイラム

2019年3月～2019年4月にかけて、水の神様のお祭りにプッタバルティへと、義母と妻が行かせて頂きました。その時に、ガヤトリー女神像を求めました。妻は、以前からガヤトリー女神像の像を求めようと思っていたので、プッタバルティ滞在中に店へ行き、店員に勧められたまま、何の疑いも持たずに一体の像を購入し、帰国しました。ところが、日本に帰ってから弟に見せると、「これはガヤトリー女神像ではないのではないか。」と言われ、驚いた

妻は、定例会などに参加されているサイの学生さんに聞いてみることにしました。そこで、その像はガヤトリー女神像ではなく、ラクシュミー女神像だという事が分かったのです。

少し話が前後しますが、妻が女神像の像を購入した時より以前に、私が尿管結石を患い、痛みで苦しんでいた時がありました。それを弟が心配してラクシュミー女神像の聖画と、ニーラースークタムのCDを持ってきてくれました。弟は、スワミの御言葉で【健康も富の1つです】と言われていた観点から、ラクシュミー女神像への信仰を私に勧めようと考えたそうです。そこで、聖画を自宅の祭壇の隣りに置かせて頂き、毎日仕事が終わって帰宅してから、ニーラースークタムを唱えることにしました。お蔭様で、医者にかかされていた痛みよりも、はるかに軽い痛みで済みました。その聖画の前に、妻がインドから持ち帰ったラクシュミー女神像を置かせていただく事にしました。

それから約2ヶ月半後の6月25日。朝のお祈りの時、ふと見るとラクシュミー女神像の台座の下に何かある事に気がきました。ヴィブーティのようでしたが、普段見ているヴィブーティと少し違うような淡黄色で、また、とても小さな点状状態だったので、どう判断すれば良いのか分からず、しばらく様子を見ることにしました。

6月27日、晩のお祈りの時、義母が台座からヴィ

ブーティの落ちてきたのを目にしたらしいのです。その夜、妻が仏間に入り、台座の別の所にブツダによく似た姿（皆がそう感じた）のヴィブーティの塊が現れている事に気づきました。その後、家族の全員が揃って見た瞬間、その塊が崩れました。

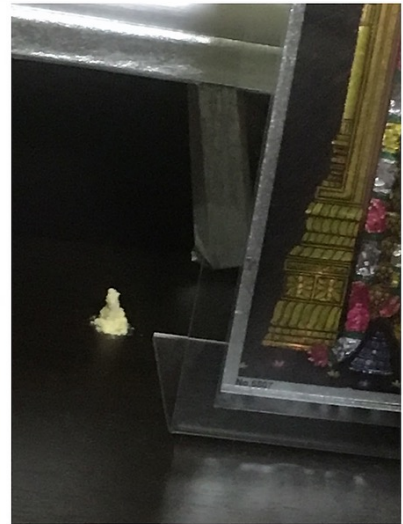
ヴィブーティはその後、毎日ではありませんが、時々出るという事が11月末まで続きました。ヴィブーティは、その都度、容器に入れさせて頂く事にしました。

同じ年の2019年10月20日、弟が脳内出血で緊急入院しました。その知らせを聞いて大変驚き、すぐに病院に行こうとしましたが、その時に、ふっとこのヴィブーティのことを思い出し、容器を持って病院に駆けつけました。そして、体にそのヴィブーティをぬりました。弟は、その後、医者から出血場所が奇跡、と言われ、また、後遺症もなく、退院することが出来ました。退院後は、難なく車の運転もしていました。私見ではありますが、まさしく、このヴィブーティが弟に何らかの奇跡を示してくれたのではないかと感じました。

改めてヴィブーティの出ていた時の写真の日付を見ますと、なぜかわかりませんが、2020・2021・2022年の7月に出ていた事に気がきました。私は、プッタバルティに行ったことも、肉体のスワミにお会いしたこともありませんが、この奇跡の体験を通して、スワミが常に見守って下さっていることを

実感し、スワミをととても身近に感じることができました。私と妻は、【奇跡は信心を深めるための名刺代わり】という御言葉から、もっともっと信心を深めなさい、というスワミからのメッセージなのではないかと思っています。

ジェイサイラム
田村克弥



2019.6.27



2019.8.17



2019.8.22



2019.8.25



2019.8.25



2020.7.23



2019.8.25



2019.8.25



2020.7.23



帰依者体験談

Bro. Mantripragada Bharat Srimitra

(Bro. マントリプラガダ バラット シュリミトラ)

プロフィール：

インドのテランガーナ州コダット (Kodad, Telangana, India) の伝統的なヒンドゥー教の家庭に生まれる。

2014年：サティヤ・サイ大学理学部入学

2014年～2017年：ブリンダーヴァン校にて理学士取得(化学専攻)

2017年～2019年：プラシャーンティ ニラヤム校にて、理学修士(化学)課程修了

2019年：サティヤ・サイ大学卒業

2019年：文部科学省の国費留学生として来日

2022年：国立北陸先端科学技術大学院大学にて、マテリアルサイエンスの博士号修了
現在は同大学の研究員

SSIOJにおいては金沢グループに所属し、全国のスタディーサークル、ナーラーヤナセヴァ、バジヤン等、多岐にわたり継続したセヴァで活躍している。

スワミはかつて「私の意志がなければ、誰もプッタパルティに入ることはできない」とおっしゃいました。プッタパルティはインドのただの町ではなく、神の愛が肉体を得て人類を向上させるために、人間の生活を営んだ場所です。

スワミは、私が2014年4月21日にプッタパルティに来ることを決めてくださいました。プラシャーンティニラヤムに滞在している間、私は独特の幸福感を味わい、スワミの教育機関に魅了され、サイ大学に入学しました。

ホステル(サイ大学の学生寮)に滞在していた頃は、多くの生徒や教授がスワミと一緒に体験した奇跡を話していました。それらの体験に興味を持った私は、自分の人生にも奇跡が起こるようにとスワミにお願いするようになりました。これはおそらく、私のスワミとのスピリチュアルな生活の初期段階であり、私はしきりと祈り、神の奇跡を求めました。しかし、スワミは何を与え、何を与えないかをご存知です。ホステルにいた頃、私は特別な奇跡を体験していません。しかし、奇跡を求める私の探究心は、スワミは奇跡を起こすから神なのではない、神だから奇跡を起こせるのだ、ということに気づきました。スワミは神だから奇跡を起こすことができるのです。

それからの私は、奇跡を体験することを求めるのをやめ、神を体験することを求めるようになりました。こうして、ホステルにいた頃の私は、無私の奉

仕を通してスワミとつながることができました。

サイ大学のある教授は、「スワミの最大の奇跡は、スワミが学生を自分の世界に連れて行くことです」「学生を自分の仲間に入れ、その人を良い人間に育てることです」と言っています。ホステルは、学生が人格を形成するための一つの手段です。スワミの愛は、一度味わうともっと欲しくなるものなのです。

このように、私は5年間、スワミの教育機関において、様々な素晴らしいイベントやお祭りに参加し、スワミの愛を体験することができました。時間が経つのはとても早く、5年という年月が、たった5ヶ月のように感じられました。時々、もしサイ・アバターが誕生しなかったら、私やサイの帰依者はどうなっていたのだろうと思います。

On a parched heart,

He showered a stream of nectar.

乾ききった心に
彼は甘露のシャワーを浴びせてくれた

To a swagger mind,

He showed a purpose.

振り回される心に彼は目的を示してくれた

To a turbulent soul,

He gave peace.

乱れた魂に彼は安らぎを与えてくれた

**To a lost traveller,
He showed the path to reach him.**

迷える旅人に
彼は彼にたどり着くための道を示してくれた

**To an endless journey,
He showed the destination.**

終わりのない旅に
彼は目的地を示された

スワミが化身となるという決断をしたことで、何百万人もの人生の方向性が変わりました。このことを私たちは感謝しなければなりません。

その後、松見先生の助けで、私は日本で勉強する機会を得ました。これは私の人生にとって大きな変化でした。というのも、5年の間、サイの学生や先生方と一緒にいることに慣れ、そしてスワミの場所の平安な雰囲気慣れていたため、スワミの側を去ることは、私の人生において最大の決断でした。

日本に来たばかりの頃は、スワミの所に帰りたいたと思っていました。しかし、スワミは「拡大が私の人生だ」とインスピレーションをくださいました。スワミの愛は一つの場所に縛られることではありません。私はすぐにサイの使命の寛大さを体験するようになりました。

サイ大学に滞在している間、私は多くの人がサイ

の帰依者の献身について話すのを耳にしました。日本から来たサイの帰依者たちの献身的な姿について、多くの人が話しているのを耳にしました。そして私は日本に滞在するなかで、それを直接体験することができました。

金沢グループのバジャン会で、バルヴィカスの生徒がナーラヤナ ウパニシャッドを唱えるのを初めて聞き、ここの帰依者の献身的な姿に驚かされました。おそらく、これが拡大の一例なのでしょう。個人的に私はスワミに会ったことはありませんが、スワミの御教えにあるように、拡大が彼の人生であるなら、彼の人生は今も続いているのです。

サイの活動は広がり続けています。バジャン、スタディーサークル、ナーラヤナ セヴァなど、様々な活動によって、私はスワミとつながり続けることができました。

スワミはプラシャーンティ ニラヤムにいます。まさしく、それは真実でしょう。プラシャーンティニラヤムはプッタパルティだけでなく、神の愛を求めるすべての帰依者の心の中にあるのです。プラシャーンティ、すなわち平安は、心に神への愛があるときにのみ達成されるのです。

日本での滞在は、このようなプラシャーンティの獲得にさらに役立ちました。スタディーサークルのような活動で、私は毎回スワミの講話を読み、ディ

スカッションに参加するようになりました。これは良い習慣です。ジュニャーナ・ヨーガ（英知のヨガ）と言えるでしょう。

毎月のバジャン会も、今までとは違う体験です。というのも、以前はバジャンのリードボーカルをしたことがなく、音楽の知識も極めて乏しかったからです。初めてバジャンのリードを歌ったのは日本でしたが、最初はリードを歌うことに苦労しました。今でも得意ではありませんが、日本の帰依者のヒンディー語学習に対する熱心さには頭が下がります。馴染みのないヒンディー語のバジャンを学ぼうとする日本の信者の献身的な姿に刺激され、毎回バジャンに参加するようになりました。日本での滞在がなければ、私は決してリードシンガーになることはなかったでしょう。

このように、日本での滞在は、バクティヨーガ（帰依のヨガ）の別の側面を知る上で、とても役に立ちました。私はスワミに感謝しています。

もう一つ、私が参加できる素晴らしい活動、それは名古屋でのナーラヤナ セヴァです。カルマ・ヨーガ（行為を神に捧げるヨガ）は、個人的に大好きなヨガです。

スワミの大学にいた頃の、私とスワミのつながりは、献身的な活動を通じてでした。自立のための様々な活動やその他のセヴァの活動を通して、スワ

ミとつながりました。スワミのために働くことは、私のスピリチュアルな生活において、とても重要なことでした。そのような仕事では、個人の選択を放棄し、結果を神に捧げるのです。日本での私の生活には、こうした側面が欠落していることが何日もありました。

ありがたいことに、私はサイの兄弟姉妹から名古屋のナーラーヤナ セヴァを紹介されました。この毎月の活動で、約100人のホームレスの人々と、愛とスワミの祝福を共有しています。スワミは奉仕を受けている人々を、神の形であるナーラーヤナと名付けられました。実際、どの身体や物体が、神の形ではないと言えるのでしょうか？スワミはすべてを創造したのです。その神の形とも言える、あらゆるものすべて、それが、神の奇跡なのです。先ほど、私はスワミの奇跡を一度も体験したことがないと言いましたが、今にして思えば、私たちや他のだれか、あるいは、私たちの周りで起こっていることはすべてスワミの奇跡であり、私たちの体験なのです。美しい新緑の木々を見るたびに、緑の葉が赤くなっては散り、また花を咲かせるのを見るたびに、私たちはスワミの奇跡を体験しているのではないのでしょうか。

サイの組織におけるすべての活動は、私たちをスワミに近づけるようにデザインされていると私は信じています。そして、私たちの人生そのものが、スワミの美しい体験になるのです。私にとってのこれらの活動は、プラシャーンティニラヤムから離れて

いても、創造主は私を一人にしてはいないのだという安心感を与えてくれます。私は、スワミが私だけでなく、私たちの誰をも一人にしないことを祈っています。

**In darkness,
When I'm afraid,
Don't let go of me.**

**Hold my hands,
Become my Light.**

暗闇の中で私が恐れているとき
私を離さないでください
私の手を握って
私の光になってください

**In ignorance,
Don't get irritated on me.
Hold my hands,
Become my knowledge.**

無知の中で
私が苛立ちを覚えないように
私の手を握って
私の知識になってください

**When I'm weak and despair,
Stay with me,
Become my strength.**

私が弱く、絶望しているとき
私といて、私の強さになってください

**If I'm bad,
Don't let go of me.
For in your absence,
I might become worse.**

もし私が悪者になっても
私を手放さないでください
あなたがいない間に
私はもっと悪くなるかもしれない

**In my celebration,
Stay with me,
Become smile on my lips.**

私のお祝いの席で
私といて、私の唇に微笑んでください

**Stay with me,
Comfort me in sadness.**

私といて、悲しみの中で私を慰めてください

**Stay with me,
As long as words stay with language.
言葉が言葉のままである限り
私といてください**

Stay with us.....swami, become our hope.

私たちといてください.....スワミ
私たちの希望になってください



祈りは人間の唯一の強さであり、神の唯一の弱点
であると言われています。私たちは、自分たちの強
みを伸ばし、力をつけ、神を存分に体験しまし
ょう。皆さんのこれからのスピリチュアルライフが幸せで
あることを祈っています。

JAI SAI RAM

注釈：文中の詩はすべてBro. Mantripragada Bharat
Srimitraがサイ大学時代に書いた自作。

サイと共に

1998年7月28日の会話



スワミ：（ハイヤー・セコンダリー・スクール〔8年生から12年生〕の寮監に）
今日のお茶の時間は何を食べましたか？

寮監： ビスケットです、スワミ。

スワミ： ビスケット2枚だけ？

男子生徒たち： 4枚です、スワミ。

スワミ：（大学の男子たちに）何を食べましたか？

男子大学生たち： 色々です、スワミ。

スワミ：（ある男子に）試験はいつ始まるのですか？1日から？7日か8日まで？試験勉強はしていますか？

男子大学生： はい、スワミ。

スワミ：（教師に）科目は何ですか？

教師： 国際金融マネジメントです。

スワミ： インドの金融市場はどうですか？いくらか上がり下がりがあるのではないですか？

教師： はい、スワミ。

スワミ： その理由は？

教師： スワミ、ポ克蘭の原子爆弾〔1998年5月にラージャスターン州ポ克蘭で行われた核実験〕のせいで資金が得られないのです。

スワミ： いいえ、違います。それと原子爆弾とは関係ありません。すべて妄想です。
（教師に）ポ克蘭での実験についての

あなたの見解は？実験は良いことですか？

教師： スワミ、それを言えるのはあなただけです。

スワミ： 私の見解では、実験は必要ありません。なぜ核実験をしたのですか？

教師： シャクティ〔力〕と安心を示すためです。

スワミ： 私たちはあらゆるシャクティを持っています。ただの自己満足のために行ったのです。シャクティは何個の原子爆弾を作れるかということにあるわけではありません。マハーバーラタの戦いは誰と誰の間で行われましたか？

教師： パーンダヴァとカウラヴァです。

スワミ： パーンダヴァは何人でしたか？

教師： 5人です、スワミ。

スワミ： 5人だけですか？

教師： いいえ、スワミ、クリシュナを入れると6人でした。

スワミ： いいえ、彼らは10人でした。それぞれの

パーンダヴァに1人のクリシュナが付いていたので、パーンダヴァは全部で10人です。しかし、重要なのはそのうちの3人です。ダルマラージャとビーマとアルジュナです。ビーマはガダバラ（棍棒〔ガダ〕の力〔バラ〕）と、ブジャバラ（腕力）とブッディバラ（知力）を持っていました。けれども、ビーマはダルマラージャの前では身をかがめました。アルジュナはいくつ称号を持っていましたか？

教師： スワミ、10です。

スワミ： いいえ、9です。（スワミはそれらを列挙なさった） しかし、それでもアルジュナは、ダルマラージャに対して身をかがめました。ある意味で、ロシアはビーマのようなものです。アメリカはアルジュナのようなものです。そして、私たちがしなければならないことは、ダルマを守ることです。「ダルモー ラクシャーティ ラクシタハ」（ダルマはダルマを守る者を守る）。私たちのシャクティ（力）はそこにあります。原子爆弾は必要ありません。もし私たちがダルマを守るなら、ダルマが私たちを守ってくれるでしょう。

もし片方の手を与えれば、もう片方の手がそれを受け取るでしょう。もし片方の手が受け取るなら、もう片方の手は与えなければなりません。これは私が男子たちに話していることでもあります。彼らはこのことを分かっていません。彼らは片方の手で受け取って、もう片方の手で奪いたがります。それは不可能です。私の見解では、多くの原子爆弾を持っている者ほど恐れているのです。インドは、多くの原子爆弾は持っていません。各国は、原子爆弾を持つことで自国を誇っています。全世界を滅ぼすには原子爆弾一つで十分です。余分に原子爆弾を持っている国々は、その全部の原子爆弾で自らを滅ぼすことになるでしょう！

教師： スワミ、アヴァターがここにいるのですから、インドに戦争への恐れはありません。

スワミ： あなたには恐れはありませんが、政治家たちは恐れを抱いています。政治家たちは、出すべきでない公式声明を出します。彼らは民衆に話すべきことと、明らかにしてはいけないことを識別すべきです。（スワミはテルグ語の格言を引用なさった） カッコウの声は誰もが聞きたがりますが、カラスには石を投げます。だから私は、男子学生たちに、優しく甘く話すようにとお願い続

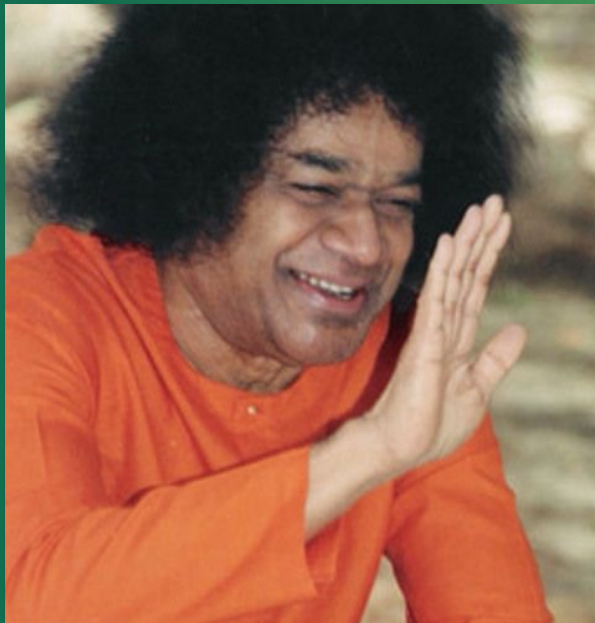
けているのです。あらゆる問題は、清らかさがなかったために起こります。清らかさがないと、憎しみが入り込んできます。憎しみが足を踏み入れると、平安と神はいなくなります。ですから、清らかさは必要不可欠です。私に言わせるなら、二国間の戦争はないでしょう。けれども、国内で、さまざまな政党間の争いがあります。

Students With Sai: Conversations 1991 to 2000 p.237-238より



<活動報告>

スタディーサークル



開催日：2021年11月4日（木）

テーマ：「ディーワリ祭の意義及び光明瞑想」

参加者：52名

質問：

- ①インドではディーワリ祭※1をどのように祝ってきたか？（学生たちへの質問）
- ②光が偉大な力をもつのはなぜか？
- ③光明瞑想から恩恵を感じた体験は？

<参加者のコメント>

… ②光が偉大な力をもつのはなぜか？

「先ほどのお話で、この日には聖なるエネルギー、ポジティブなエネルギー、美しくて神聖なエネルギーが悪を滅ぼしたエピソードがたくさんあることが分かった。阿修羅がこの日にクリシュナ※2によって滅ぼされたという御講話にもあるように、人々が神の性質である真善美を思い起こして、六つの敵を滅ぼし、よりいっそう神聖な道をたどり、暗闇を隅から隅まで消す日だと思う。神の話をするると抵抗のある人でも、光というほとんどの人が受け入れやすいといろいろな人と話していて感じる。」

… ③光明瞑想から恩恵を感じた体験は？

「日々の短い光明瞑想でも落ち着いたり、心の動きを止めてくれたり、至福や平安が感じられ

る。」

「光明瞑想は光自体を思い出させてくれるので、疲れたときにハートが温かくなるような感じが得られ、自分の身体は光の点の集合なのだと思うしてくれる。やっていないときと、やっているときとでは違うので、時間のないときでも数分でも続けている。最近のどを痛めたり、呼吸のバランスを崩していたが、光明瞑想を続けていると少し楽に感じることもある。今日はディーワリの光の祭典ということで、これまで私もラクシュミー※3のお祭りとしてこの祝祭を過ごしてきたが、今日は嬉しいことがあった。以前職場で落としてしまった指輪があって、それは太陽を意味する指輪だったが、まったく見つからなかった。それが半年以上経って、（中略）自分のもとに半年以上ぶりに戻ってきてくれた。今日の話は太陽や光の話が中心だったが、失くしていた指輪も光とつながって見つかったのではないかと思った。」

<サイの学生のコメント>

… ①インドではディーワリ祭※1をどのように祝ってきたか？

「サイ大学に入る前、まだ家にいた頃は、このディーワリの祝祭はダサラー祭※4が終わった時から始まっているという感じだった。ディーワリは

インドで一番大きな祭りになっていて、すべての人が休みを取る。ディーワリの祝祭の時には、いつも父は5日間休みを取って祖母の家を訪れた。祖母の家にはすべての親戚、兄弟姉妹が皆集まって、一緒に祝祭を祝っていた。集まるとまず皆で家の掃除を始める。そして光（ランプ）を装飾をする。幼い頃はこのディーワリがそれほど好きではなかった。なぜなら母とか年長の人たちから、『若い人たちは掃除をしなさい』と言われていたから。勿論その後はディーワリのことをとても好きになった。なぜならディーワリの日には仕事はなく、皆でごちそうを食べて、贈り物を交換し合い、花火があったりした。この日の意義について両親から教わったことは、（当時はバールヴィカスの子供だったが）『この日は本当に神聖な光のように他の人に話をしなければならぬ』ということ。サイ大学に入ってから、このディーワリがさらに霊的なイベントになった。学生寮では一人ひとりが部屋を掃除し、スワミ※5に祈った。『しっかり勉強します』、『試験で良い点数を取ります』、『しっかり働きます』、そういったことをスワミに約束した。ときには大学で秋休みがあり、ディーワリが秋休みの一部になっていた。その時には、私たちは皆実家に帰らなくてはならなかった。大学ではいつも一生懸命勉強していたので、実家に帰ると喜んで寝ていた。そうしていると両親がやってきて『掃除をするように』などいろい

ろとお願いされた。何年か過ぎて、親に言われて掃除をするのではなく、自発的に掃除をするようにならなくなっていった。そのような変化はサイ大学での生活で得られた、自分自身に頼る習慣の賜物であった。いろいろな仕事を他人に頼らずに自分自身に頼ることで、自分自身だけではなく両親をも幸せにすることになった。」

「皆さんがご存知のようにディーワリの日にはラーマ※6がラーヴァナ※7を殺してからアヨーディヤ（ラーマの生誕地）に帰ってきた日。またこのディーワリの日にはラクシュミー女神が生まれた日とも考えられている。同時に、この日は12年間パルヴァ兄弟※8たちが森で過ごした後に王国に帰ってきた日であるとも言われている。またある有名なグルが牢獄から解放された日とも言われている。さらには、マハーヴィーラー※9が涅槃を達成した日でもある。自分の出身の西ベンガル地域では、ある怒った女神様がすべての邪悪な悪魔を倒した日であると信じられていた。これらすべての物語では『善が悪を倒した日』と捉えることができる。私の出身地では、ディーワリを5日間続けて祝う風習がある。最初の日には、金などの装飾品を購入する習慣があり、その日にカラスや鳥たちを敬う習慣があった。食べ物を与えて花輪を作って、そこにマリーゴールドの花を飾った。カラスを敬う理由は、カラスは死神の使いだと考

えられているからで、彼らを敬うことにより長寿を得ようとする意義があった。次の日は犬を敬う日で、前日と同じように犬にも食べ物を与えて、花輪を用意して、マリーゴールドを付けて、犬に対して感謝する。なぜなら犬は私たちに対して非常に忠実でいてくれるから。そしてディーワリの日には家に礼拝を捧げる。また牛にも同じように花輪とかマリーゴールドの花をつけて、家にもマリーゴールドの花をつけて光（ランプ）で装飾する。その日には女性たちは伝統の衣装を着て集まり、民族の歌を歌ったりする。ディーワリが終わった次の日には男性たちが集まり、今度は彼らが歌を歌ったりする。ディーワリの後日には兄弟姉妹の間の繋がりを祝っていた。最初にシスター（姉妹）たちが歌を歌い、『男性たちが良い繁栄した人生を送るように』と祈っていた。その日には女性が額に何かをつけて、お寺へ行っては帰ってきて、3回巡礼していた。シスターたちが祈ってくれたお返しに、次は男性たちがシスターたちに贈り物をした。そのようにディーワリの祝祭は非常に美しく、皆の関係にポジティブさをもたらし、そのポジティブさを近隣の人々すべてにもたらしてくれた。同時に、内的な意義として私たちの内なる暗闇を追い出してくれた。」

…②光が偉大な力をもつのはなぜか？

「御講話でスワミが光明瞑想について説明してくださっているが、その中でも、なぜ光がそれほどにパワフルであるのかを説明してくださっている。スワミは小さなランプの例を挙げられる。例えば水を入れる水がめの中から少しずつ水を取り出し続けると、いつしか水がめは完全に空っぽになる。それに対して、隣にあるランプに灯を移して灯し続けると、ランプの場合には1000ものランプを照らしたとしても、最初のランプの輝きは全然変わらない。それがなぜ光明瞑想がそこまで大事であるのかという理由。なぜなら、常にそのようにエネルギーを与え続けることができるから。スワミは至高神であるパラマートマが光であるとおっしゃっている。本当に永遠の光というものが私たち一人ひとりのアートマ（神我）に光を灯してくれるのであれば、私たちが社会に対して愛を広げることによって、社会に愛の灯を灯すことができるということ。灯の輝きは、愛と同じでどれほど広がって行っても、決して衰えることがない。」

…③光明瞑想から恩恵を感じた体験は？

「自分のバールヴィカス（子供の開花教室）の先生だった方も毎日光明瞑想をしてきた方だった。その先生がおっしゃるのは、最初プッタパーティ※10に行ったときは、パーティの場所の影響で心のなかの落ち着きのなさが去ったり、良い効果

があった。しばらくそこに留まっていると次第に元の状態に戻ってくるが、ずっと光明瞑想を続けているとパーティにいなくても落ち着きのなさが消えていって、プッタパーティが心の中にある状態になり、パーティにいなくても心の落ち着きのなさが去っていったとのこと。その先生は人生のいかなる難しい状況も顔に微笑みを浮かべながら対処することができる方だった。今思い返すとこの光明瞑想のことを思い出して、なぜ彼がそのように振舞うことができるのかということ思い出した。これが光の重要性。どんな文化でも国でも光が力をもったものとして描かれていて、そのように理解できるのだと思う。」

「ドイツに移住したあるインド人の家族がいた。長年のスワミの帰依者だった。男の子と女の子と二人の子供がいた。男の子のほうで深刻な健康上の問題をもっていて、特に眠っているときにも痛みを感じていた。その時に女の子のほうは教育を受けるために家から離れたところで過ごさなければならなかった。彼女には毎日20分スワミに瞑想する習慣があった。瞑想していた時に、男の子の病気が深刻になってきたので、スワミに『どうか私の祈りも聞いていただけませんか』とうかがいを立てた。その翌日、父親から彼女に電話がかかってきて、長いローブを着た人が寝室に入ってきたとのこと。とても暗かったので父親には誰が

部屋に入ってきたのか見えなかった。父親は起き上がって誰が来たのかを確かめようとしたが、そのローブを着た人は『私は沐浴に来たのですから、私の邪魔をしないでください』と答えた。この家族は長年の帰依者だったので、それがスワミだということはすぐに分かった。スワミが病気の男の子に何かをしてくれて、そのおかげで男の子の病気が翌日には治っていた。この話から分かることは、とりわけ瞑想をしているときには、神への強い集中力によって、その中で祈りをしたことに對して神様が答えてくださったということ。」

<ババ様の御言葉>

「聖日を祝うことはご馳走を食べることを意味しているではありません。アヴァターたちの御教えを、自分の生活の一部にするよう努めるべきです。アヴァターたちによって敷かれた道をたどるべきです。そのとき初めて祝祭は意味を持ち、人生も聖化されます。あらゆる学習も、吟唱も、講話を聴くことも、教えの後に実践が伴わないのであれば、何の役にも立ちません。」

ババ

1988年3月26日

https://sathyasai.jp/discourses/discourses/d_19880326.html

※1ディーワリ祭：ラクシュミー女神を祀りランプが灯される。ディーパーヴァリとも呼ぶ。ヒンドゥー教三大祭の一つ。商人階級や庶民のお正月。ヒンドゥー教徒にとって新年とも言える大祭で、毎年10月下旬から11月上旬ごろのカルティカ月（ヒンドゥーの暦の7番目の月）の新月の夜に行われます。別名を「光の祭り」とも呼ばれる。

※2クリシュナ神：ヴィシュヌ神の化身、ドワーパラユガにおける神の化身 純粋な愛の具現。

※3ラクシュミー：ヒンドゥー教の女神。ヴィシュヌ神の神妃。幸運と美を司る類いまれな美しい女神として信仰されている。

※4ダサラー祭：ドゥルガー、ラクシュミー、サラスワティーに象徴される三つのグナを打ち破り、無知からの解放を願うヒンドゥー教の祭礼。ナヴァ ラートリー（九夜）ともいう。アーシュヴィン月の新月に始まる。通常三日ずつ各女神を礼拝する。プッタバルティではヴィジャヤ・ダシャミーまでの1週間ヴェーダ・プルシャ・サブターハ・グニャーナ・ヤグニャ（第1回1961年開催）が行われる。また、この期間、プラシャーンティ・ヴィドワン・マハー・サバが開かれて学者がスピーチを行い、学生と学校のスタッフを中心にグラマ・セヴァが行われる。ダサラー、ダシャラ、ダセラーほか、さまざまな言語の呼び名がある。

※5スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

※6ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美德と正しい行いにおける最高の模範。

※7ラーヴァナ：『ラーマーヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。

※8パンドヴァ兄弟：「パンドウの息子たち」の意。『マハーバーラタ』に出てくるパンドウ王の五人の息子

※9マハーヴィーラー：ジャイナ教の開祖。

※10プッタバルティ：スワミの生誕地であり本拠地である町の名前。

開催日：2021年11月7日（日）

テーマ：プレーマヴァーヒニー第10節、第11節
「『私』と『あなた』が『私たち』に、『私たち』は『彼』になるべき」、「世俗的な楽しみへの執着を捨て、神への執着を育みなさい」

参加者：37名

質問：

- ①一体性を世界の多様性の中にどのように見出すべきか？
- ②日常生活において靈性修行を統合的に行うには？
- ③カルマ※1、ダルマ（正しい行い）と神の恩寵との間の関係とは？

<参加者のコメント>

… ①一体性を世界の多様性の中にどのように見出すべきか？

「以前サイの学生さんから、思いと言葉と行動の一体性があるときに、世界との一体性があるという御教えが紹介された。『私』から『私たち』になる時に『私』というのが肉体の私であったとしても、『私たち』と言った時には思いと言葉と一緒にしてくるのだろうかと考えた。」

「『私』という存在は肉体として見ている存在で、『私たち』になると肉体を超えたものになってくる。『私』から『私たち』になる一体性は、例えばサット チット アーナンダ（存在・意識・至福）という言い方ができるのかもしれない。すべてが命をもっていて、その命の本質は愛であり、すべての人に愛がある。自分だけでなく、すべてのものは同じ存在であると、それを通して見ることができるのかなと感じた。」

… ②日常生活において靈性修行を統合的に行うには？

「必要なのは神を思い出して、神に祈ることで、後は神が救いの手を差し伸べてくれるという言葉がすごく心に響いた。神を思い出して、神に祈れば、神様が今やるべきことやセヴァ（奉仕）などをすべて用意してくれる。」

「毎日をスワミ※2に喜んでもらえるように過ごすことができるなら、とても嬉しい。人生は、神と一つになるためという目的を常に思いつつ、スワミに喜んでもらえるようにダルマに叶った生活を送る必要がある。私の場合は一番大切なものは朝晩のお祈りで、心の中で御名を唱えられる時はできるだけ御名を唱えて、怒りが生じたり、感情が乱れた時には客観的に見て自分の何が今悪い

のかと分析したりすることがとても大切だと思う。」

… ③カルマ※1、ダルマ（正しい行い）と神の恩寵との関係とは？

「スワミの御言葉で『神の祝福と神の恩寵は違います』というものがあつた。祝福はエネルギーを与えて応援してくれるようなこと。恩寵はカルマを帳消しにする。カルマを帳消しにすることで、初めてスワミとのハートとハートとの関係ができるのではないのかなと思った。」

「日常のサーダナ（霊性修行）で例えば瞑想やジャパ※3などの儀式的なサーダナよりも、日常の中で幸せを祈ったりする行為の方を神はもっと喜んでくださるという話があつた。カルマ、ダルマ、神の恩寵との関係においては、神を喜ばせるための行いがカルマ。そして自分の役割を果たしていくということがダルマ。それは自分を置いて、個人ではなくてまさにアートマ※4として神のために行くこと。そういう行為を神が喜んでくださり、私という意識をなくして行う行為により、神の恩寵をいただけることになると思う。」

<サイの学生のコメント>

… ①一体性を世界の多様性の中にどのように見出すべきか？

「自分が行っている実践の一つ目としては、すべての人はいろいろな違いがあり、それぞれの個性を受け入れるということ。個性、独自性が存在するのはそれが創造されたから。その創造による性質は他の人が変えることができないもの。もう一つ考えなければいけない大事なことは、すべての違いにもかかわらず、最終的に到達する目標、神に到達することにおいてはすべての人がまったく同じであるという点。もう一つさらに大事なことは、日常生活の中でどのように真実を心に留めておいて、どのように世界と関わるべきか、ということ。例えば職場や家庭で何かしら議論が起こったり、誰かの行動、思い、振る舞いが好きでなかったり、他の人たちも私たちの思い、振る舞い、行動を好きではないということも起こる。こういったことが起こると、怒ったり落胆を感じたりするが、その相違はあくまで旅の途中の過程にすぎないと分析をして知ることができていないから。そこで分析して分かってくるのが、過去は過去だと忘れることの重要性。なぜなら他者の道のりをすべて知らず、他者と共通しているのはただ目的地が同じということだけ。その人は私自身な

のだと思うことで問題が解けて消えてなくなっていくのではないかと思う。心の状況を整えるということがポイントだと思う。しかし、ネガティブに捉えると状況を整えることが難しくなっていく。ゆっくりと実践していくことによって、次第に私たち自身を他の人たちの中に見ることができる。そのサイクルの中で、周囲のものの中に私たちを見る度合いが深まり増えていくのではないのかと思う。インド文化の中で『世界が家族であり、私たちがみなその子供である』という言い伝えがある。どのようにして『私』が次第に『私たち』になっていくことができるのか。それが多様性の中に一体性を見ることだと思う。」

「ワンネス、全一性をもった人が真の人間であるとスワミはおっしゃっている。様々な相違のおかげで、私たちはいろいろな悲しみに直面する。もし私たちが他の人たちの良い傾向にもっとフォーカスしていくことができるのであれば、彼らともっと上手にやっていくことができるのではないかと思う。そして、もし私たちがハートの中に神聖原理を植え付けることができるのであれば、より良い創造物になれる。私たちは皆が単に神の創造物であるので、同時に他の神の創造物を破壊したりする権利は有していない。すべての行動は神への捧げもので、神を喜ばせるためだけのもの。例えばハヌマーン※5が海を渡った時に、ラーマ

の御名を唱えながら海を渡った。ハヌマーンがランカー※6への石橋を作りあげた時、ある石にはラーマ※7の『ラ』を書いて別の石には『マ』を書くようにと指示をした。そうすると『ラ』と書かれた石と『マ』と書かれた石とがつながって、橋が形作られた。そのようにして橋をうまく作ることができて、一体性の原理と神の原理で橋が出来上がった。同じようにもし私たちがお互いの中に神としての性質を見ることができるのであれば、同じように橋を作ることができて、神聖へと到達することができるのではないかと思う。」

… ②日常生活において靈性修行を統合的に行うには？

「65回目のスワミの御降誕祭で、スワミが日々のサーダナについて話してくださった時があった。スワミは瞑想とは私たちの心の一点集中であると説明された。そして私たちが世俗的な仕事や、他の人と話をしていたり、あるいは車を運転していたりすることは、一種の一点集中を伴った瞑想であるとスワミがおっしゃっている。必ずしもジャパマラー※8を持ってナーマスマラナ（唱名）をするとか、そういったことがサーダナという訳ではないということだった。例えば誰かに話す時、その時に愛をもって話しかけるのであれば、ただそれだけをもってスワミにつながるができる。

そして、同じ御講話の中でスワミは、「I to we to he（私から私たちへ、私たちから彼へ）」ということに関して、ロケットの例を出され、一つひとつのネジとナットとかボルト、金具の一つひとつ、そのすべてがエンジンと等しく大事なのであり、すべてのロケットの部品が、それらの義務を果たして、初めてこのロケットのミッションが成功するゆえに、宇宙のすべては神の一部であると説明されている。それと同様に、この宇宙のミッションが進化していくためには、すべての構成する人々が、一人ひとりの義務を適切に行なった時に初めて、その宇宙の使命が進歩していくことができる。同じ神が、宇宙の中のすべての原子の中に顕れていると、それがヴィシュワルーパ※9。そして世界の幸せというものは、一人ひとりの幸せに大きく依存している。なので、私たちは一人ひとりの幸せや義務にしっかりフォーカスをしていけば、その世界の幸福は自ずとやって来る。」

「私たちはこの日々のサーダナを3つの違う道として、また一方では統合的に行なっていくことができると思う。帰依の道と、行為の道と、英知の道。その3つの道を統合して日常で実践できると思う。そして、この3つの道がいかなる帰依者によって実践される時にも、その3つの道の中のどれか一つが、その帰依者にとって主要な道になっているとスワミは指摘されている。例えば、

帰依の道の例を考えてみると、インドでは皆、自分の両親も、まずお祈りから一日を始め、朝に必ずお祈りを行なってからその日を始める習慣を人々がもっている。そして夕方にもランプを灯してお祈りをしている。それが帰依の道を日常生活の中に統合していくための一つの方法。カルマの道について考えると、私たちは常に他の人に対して助けを差し伸べることができ、それが私たちにカルマの道を与えてくれる。そして私たちが行動する時に、その思いの背後にあるべきなのは、私たちが行なっているいかなる行動も、それはあなたがそれを行なっているのですという思い。私たちがそのような神への想いで行動できているのかどうかということが、私たちがカルマの道を歩むことができているかどうかという指標になると思う。（ナーラダ※10、ヴィシュヌ※11、農夫の間のエピソードのご紹介がありました；日に3度のみ神の御名を唱える農夫をヴィシュヌ神が賞賛したエピソード）。私たちも忙しい日々の中で、義務を適切に果たしながらも本当に可能な限り、時折でも神の御名を唱えて、その恩寵を想うことが必ず神を大いに喜ばせると思う。そして英知の道を日常において行っていくための方法としては、毎日少しだけでもサイ文献を読んだり、あるいは帰依者の体験を読んだり、そして読んだことを自分なりに分析し、それを自分の生活の中で応用していくことができれば、それが英知の道の送り方

になると思う。」

… ③カルマ※1、ダルマ（正しい行い）と神の恩寵との間の関係とは？

「カルマがダルマの示すことを行っていくなれば、恩寵は自動的にやってくる。スポーツ祭のために、オートバイで空中スタントをしていた学生が、スワミが帰られる様子を横目で見た。スワミがそれを見ていらっしや、マンディール※12に帰られた時にそこにいた学生を全員インタビューに呼んだ。その時にスワミは皆に『オートバイを運転している時には、決して私の方などを見てはいけない。その時には皆さんはオートバイを安全に運転することに十分にフォーカスしていなければなりません。でも皆さん、そういうことをしている間、ずっと私の方を見ていますね』とおっしゃった。スワミがおっしゃったことを考えると、それはまさにカルマとダルマと神の恩寵との関係について教えてくださいましたのではないかと思います。私たちが行っている仕事に完全なフォーカスが必要である。そして神を心の中の背景として、その行いの背後の行為者として心に抱きながらそれを行う。そうすればすべてのことを神が面倒を見てくださる。すべての行いにおいて、私たちは心の裏側では、完全な神への集中を基にして行うことができる。マハーバーラタ※13でパーンダヴァ兄弟※14

が行ったすべてのことは、単にクリシュナ※15のためではなく、すべてのことをダルマのために行った。ダルマのために行ったので、クリシュナは彼らのそばに付いてくださった。ダルマがあるところにはクリシュナがいて、クリシュナがいるところに勝利があるということ。」

<ババ様の御言葉>

「神の恵みを確保するには、正しい行い〔ダルマ〕を固守し、思いと言葉と行いの清らかさを維持しなければいけません。親切と慈悲は本当の人間の印です。今の若い人たちは、千の嘘に耳を傾けることを躊躇しませんが、一つの真実を心に留める忍耐力がありません。調子のいいことを言ってこびへつらう百人の人よりも、愛をもって語る一人の正直者のほうが良いのです。」

ババ

1984年2月9日

https://sathyasai.jp/discourses/discourses/d_19840209.html

※1カルマ：「行為」（業=ごう）そのものと、「行為の結果」や「カルマの法則」（因果応報）の両方を意味する。善因楽果、悪因悪果を原則とする。

※2スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。

※3ジャバ：マントラや神の御名を繰り返し唱えること、唱名（御名の場合）。

※4アートマ（テルグ語）：神我。神性。魂。自己。心霊。内在する神の火花。本当の自分。同一の魂。アートマ（サンスクリット）。

※5ハヌマーン：『ラーマーヤナ』に登場する猿。ラーマを深く信愛し献身をささげた。風の神の子で空が飛べたため、飛んで菓草をとりに行ったり、海の上を飛んでランカを偵察に行ったりと、多大な貢献をした。

※6ランカー：『ラーマーヤナ』の悪鬼ラーヴァナの王国。

※7ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美德と正しい行いにおける最高の模範。

※8ジャパマラー（サンスクリット語）ジャパマラー（テルグ語）：ジャバをするための数珠。マラーは数珠、花輪、王冠、ネックレスの意。

※9ヴィシュワルーパー：一切相。全宇宙としての姿。一切の姿形を有する者、普遍なる者、全知全能者、一切普遍相、あらゆる形態を持つ者、全知全能者の意、ヴィシュヌ神の別名。クリシュナがアルジュナに見せたことで知られる神の姿。ヴィシュワはすべて、ルーパーは姿形の意。

※10ナーラダ（仙）：世界に信愛を広めるためにブラフマーが創った聖者。ナーラは「知識」、「ダ」は「与える者」の意。いつも神の御名と栄光を歌っていたことで知られる。ヴィーナの創作者でもあり、ヴィーナを携えて三界を自由に行き来する

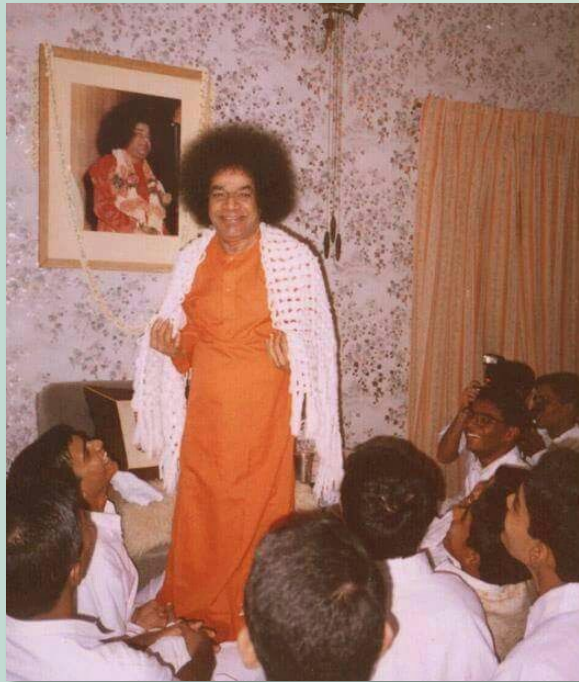
※11ヴィシュヌ（神）：宇宙を維持し守護する役割を担っている神。

※12マンディール（英語）：礼拝堂、神殿、寺院、待合所、滞在所、家、宮殿、寺、町、キャンプ、会場。マンディラ、

マンディル (サンスクリット語) マンディラム (テルグ語)
 ※13 マハーバーラタ: 従兄弟の関係にあるパーンダヴァ側とカウラヴァ側の間で行われた十八日間の戦争を背景とした大叙事詩。

※14 パーンダヴァ (兄弟): 「パーンドゥウの息子たち」の意。『マハーバーラタ』に出てくるパーンドゥウ王の五人の息子、ユディシュティラ (ダルマジヤ)、ビーマ、アルジュナ、ナクラ、サハデーヴァのご兄弟の総称。ダルマジヤとビーマとアルジュナはクンティ妃の息子で、ナクラとサハデーヴァはマードリー妃の息子。

※15 クリシュナ (神): ヴィシュヌ神の化身、ドワーパラユガにおける神の化身 純粋な愛の具現。



開催日: 2021年11月10日 (水)

テーマ: プレーマヴァーヒニー第20節、21節「小宇宙の中に大宇宙を見なさい」「神の御名を聞き、熟考し、歌いなさい」について

参加者: 46名

質問:

- ①自分自身の内的な意識による恩寵をどのように得ることができるか?
- ②神の悟りを得るか、悪事を働くかは光 (御名) をどのように使うかにかかっているという御教えから、どんな実践が必要か?
- ③内側からの霊的教育への渴望をどのように甦らせ、若返らせることができるか?

<参加者のコメント>

… ①自分自身の内的な意識による恩寵をどのように得ることができるか?

「まず外的なことを自分の中で手放していく。手放して内なる神性に目覚めていくことが必要なのかなと思う。」

「スワミ※1が生きていらっしゃった時にパーダナマスカール (御足への礼拝) をした時にすごい恩寵を感じた。その恩寵を今はスワミがいらっ

しゃらない状態で心の中で感じることができるかという、すごく難しいことだなと思う。」

「1番目と2番目の質問は関連しているのかなと思う。この内なる意識、確かアンターカラナ※2と言われているものだと思う。記憶では2015年のサーダナ (霊性修行) キャンプで、アンターカラナの恩寵を得なければ、とんでもないことになるような話を聞いていて、本当に驚いた。これを一生懸命に調べた記憶がある。恩寵を得るとはどういうことだろうと調べた。改めて今日の質問の中に出てきたが、恩寵は、神の恩寵にしても、グルの恩寵にしても、あるいは帰依者の恩寵にしても、実は目の前に、私たちの周りに溢れていると思う。けれども、それが自分のものになるかどうかというのは、また別の話。例えばマンゴーとか果物に例えると、マンゴーはいっぱいあるが、それを自分が得るためには、手を伸ばして、そして皮を向いて食べないと味わえない。そういう意味できっとアンターカラナの恩寵、内的意識の恩寵とは、神の方を向く努力をすとか、澄んだ状態で、正しい在り方で初めて得られると思う。内的意識という道具の使い方が、内部に向けることによって正しい使い方になる。その結果として、恩寵を自分のものにする、手を伸ばすということになるのではないかと思った。」

… ②神の悟りを得るか、悪事を働くかは光（御名）をどのように使うかにかかっているという御教えから、どんな実践が必要か？

「前々回のスタディーサークルで、忍耐というのは武器に等しいという御言葉があった。だから結局は、霊性修行や、神の御名は武器ということだろうと思った。武器を使うのは自分たちであるので、自分自身の内面を探求して武器を良い方向に使っていかなければならないと思った。」

… ③内側からの霊的教育への渴望をどのように甦らせ、若返らせることができるか？

「私には二つのケースがある。一つは、スワミの帰依者の行為の素晴らしさに、心が洗われるときに、私も一緒に頑張りたいという思いが湧く。もう一つは、自分が困ったり間違ったり、人を傷つけたりしてとても自分が未熟と感じ、後悔したときに、霊的にもっと良い人間になりたいと渴望する。この2つのケースがとてもリフレッシュさせてくれることが多い。」

「サーダナを続けていて、自分なりに内なる神というものが少しずつ顕れてくると、そういった体験がより自分自身を内へ内へと導く。もっとそういう体験をしたいという思いが神への渴望に

なっていくのかなと思う。」

<サイの学生のコメント>

… ①自分自身の内的な意識による恩寵をどのように得ることができるか？

「今年の国際オーガニゼーションの御降誕祭に向けたテーマは『神聖なる愛』。世界中の青年たちが10分のビデオを『神聖な愛』というテーマに関して作り上げ、それも『内なる意識』に関係したもの。そのビデオの中で言っているのは、日常生活の様々な葛藤が職場や家で起こった時に、数秒間待ってみましょうということだった。集中して自分の内側から何かを聞こうとすることが必要。直ちに何が正しい行いなのか、正しい選択が見えてくる。どうするべきかに対して黙想せずに次のステップに移ってしまうと、それは私たちのエゴ（自我意識）を満たすことになってしまうかもしれない。内なる意識に対して黙想した後では、間違いなく至福や幸福を得ることができるようになる。それらの行動を一日中行うことができれば、神と共に暮らすことができる。そして行動が神聖になっていく。それが私たちの内なる意識による恩寵というものではないかと思う。」

「スワミがおっしゃっていることは、恩寵を得

るためには内なる声をよく聴かなければならないということ。なぜならそれが上手くできないときは欲望の方によりフォーカスしてしまい結果として欲望を満たそうとしてしまうから。つまり内なる声の導きを欲望は遠ざけようとする。だから自分の欲望を精査するとともに、内なる声を聴こうとしなければならない。内なる声を聴くことができれば、そこから正しい判断ができるようになると思う。でも欲望に主導権を握らせてしまうと欲望の向かう方向に委ねてしまうことになるから、私たちは自分の内側の意識を訓練して、内的なる声を聴くことによって内的恩寵を得ていく必要があると思う。

… ②神の悟りを得るか、悪事を働くかは光（御名）をどのように使うかにかかっているという御教えから、どんな実践が必要か？

「光を上手く使うことを実践するためには、神の御名を唱えたり、困っている人を助ける。特に貧しい人、助けを必要としている人への奉仕が最善の実践ではないかと思う。そういう貧しい人を目にした時に、私たちにできることが2つある。一つは私たちの能力の範囲内でできるのであれば、私たちの手で直接何かをして差し上げる。もう一つは、もし自分たちではできない場合には、やはり神に祈り、神様が間接的に助けてくださるよう

に祈る。その二つができると思う。そして、「サイラム、サイラム」と神の御名を唱えることや、神のお話を聞いて、サイ文献を読むことで神とつながることができる。」

「ある種の人々は神の御名を唱えることによって霊的に成長していく人々もいれば、一方で神の御名を唱えながら、他者と喧嘩する人々もいる。単に神の御名を唱えるというだけではなく、様々な行いをする時に、他者を愛することや真実を守ることなどの実践を確かなものとしていくことが必要。」

… ③内側からの霊的教育への渴望をどのように甦らせ、若返らせることができるか？

「これは今日まで行ってきたすべてのスターディーサークルに関連した質問だと思う。まず第一のステップはサットサング（善い仲間に加わる）※3の重要性。同時にABCの中で悪い仲間を避けなさい（Avoid Bad Company）という点があった。ラーマヤナ※4でもマハーバーラタ※5などの文献で言われていることだが、一度善い仲間を得たのなら、それによってより善い行いをしていく熱意が増していくということである。そしてサットサングの相乗効果が起こる。また日常の中で何か行っていることに問題が起きて落胆し

た時、自分たちが毎日行っていることが正真正銘正しいことなのかという疑問が生じることが時にある。そういった時にこそ、自己探求と自分にモチベーションを与えることがこの道を通る上で非常に大切になる。今日の時代背景を見ると、皆が非常に忙しい毎日を送っている。このような人生において、皆にとって大事なことは心の平安を得るために時間を確保することの必要性。そういった中で本当にシンプルなサーダナ（霊性修行）であってもバジャン（神への讃歌）※6を歌ったりヴェーダ※7を唱えたり、神の御名やガーヤトリーマントラ（太陽神に捧げられる讃歌）を唱えたりすることの継続が、私たちが地に足をつけて根差していくことを可能にしてくれる。そういうサーダナを日々行うことが私たちの心の波立ちを抑え、助けてくれると思う。」

「神のことをバーヴァプリヤ（気持ちを愛する者）と呼ぶ言葉があるが、神のことを想う時にどういう想いで描くかが非常に重要。それはスワミがおっしゃるところの幸福の体験とも結びつく。もちろん一人ひとりの捉え方によって、その人によってどうすれば渴望が甦るのか、若返るのかというのはそれぞれ違うと思う。人によってバジャンだったりセヴァ（奉仕活動）だったりヴェーダだったりそれぞれだと思う。それ以上に最も大事なことはどういう方向に向かっていくのが正しい

道であるのかということ。例えばラーマ※8もラーヴァナ※9も二人ともシヴァ神に対するプージャー（礼拝供養）※10を行っていた。彼らが戦争で戦う前には、二人とも同じシヴァ神※11に対して祈っていた。でもそこで勝利を得られるのは正しい道を選んだ人であり、決して間違った道を選んだ人ではない。今日の霊性の道においても、正しい道を選んでいくことが非常に大事になる。初めてブリンダーヴァン※12に入学した時に、少し霊的なことを学んだ時、自分はもうこれで分かったと思っていた。でも卒業して実社会に出てから初めて自分の知識の深みがどの程度だったのかということを知ることになる。そういった意味で実践ということが非常に大事だと思う。」

「他者を傷つけないようにしていくことだと思う。多様性の世界の中では人々は様々な考えをもっており、善人も悪人もいる。霊的教育とは、私たちが何が良くて何が悪いのかを識別することを助けてくれるものだと思う。また、霊的教育だけが私たちに自己探求の道に導いてくれる。私たちがより幸せになるために、霊的教育とつながっていくことが今日の教育の中で非常に大事。」

「霊的教育は単に何か本を読むことで簡単に得られるものではない。それはずっと継続的に行われていくべきプロセスで、それには常に自己分析

が伴っているべきだと思う。例えばスワミの御教えで、お祈りをすれば心が浄化されるとあったとしても、ただお祈りをすれば心が単純に浄化されるものではなく、献身的にお祈りをするによって初めて心が浄化される。例えば、私はこれを学んだからお祈りの仕方がわかったとか、瞑想の仕方がわかったというものが霊的教育ではない。そうではなくて、それをとおして、私は昨日よりも今日の方が善い人間になれたと言えることが霊的教育を受けていくことだと理解している。」

<ババ様の御言葉>

「神の恩寵は容易には得られません。「私が行為者である」と言わせる「私が」という自我意識は、ハートから根こそぎ摘み取らなければなりません。誰もが、教育があろうとなかろうと、神を知りたいという圧倒的な衝動に駆られるはずで、神は己の子供たちすべてに対して同等の愛情を抱いています。明るくすることが光の本性です。その光を利用して、ある人は良書を読むことができ、ある人は日々の業務を何でもこなすことができます。同様に、神の御名を口にしながら、ある人は神の悟りへと近づくことができ、ある人は悪事を働くことさえできるのです！それはすべて、あなたがどのように光を使うかにかかっています。」

しかし神の御名に傷が付くことはありません。常に、そして永遠に。」

ババ

プレーマヴァーヒニー第21節

※1スワミ：聖者などの尊称、ここではサイ・ババ様のこと。
 ※2アンターカラナ：内面の道具。考え、感じ、欲望を抱く心（マナス）、理解し、推論し、決断する知性（ブッディ）、記憶（チッタ）、自我意識（アハンカーラ）という四つの心理的機能。

※3サットサング：善人との親交、神との親交、善い仲間と共に過ごすこと、善い仲間に加わること。

※4ラーマーヤナ：ヴィシュヌ神の化身ラーマの物語。インドを代表する大叙事詩の一つ。

※5マハーバーラタ：従兄弟の関係にあるパンダヴァ側とカウラヴァ側の間で行われた十八日間の戦争を背景とした大叙事詩。

※6バジャン：神への讃歌。ヒンドゥー教の聖歌、礼拝、神の栄光を歌うこと。

※7ヴェーダ：神聖な真理の言葉、神の息吹の集成であり、古代インドの聖賢たちによって視覚化された。もとは一つだったものをヴィヤーサ仙がヤジュル ヴェーダ、リグ ヴェーダ、アタルヴァ ヴェーダ、サーマ ヴェーダの四つに編纂した。

※8ラーマ：トレーターユガにおける神の化身、美德と正しい行いにおける最高の模範。

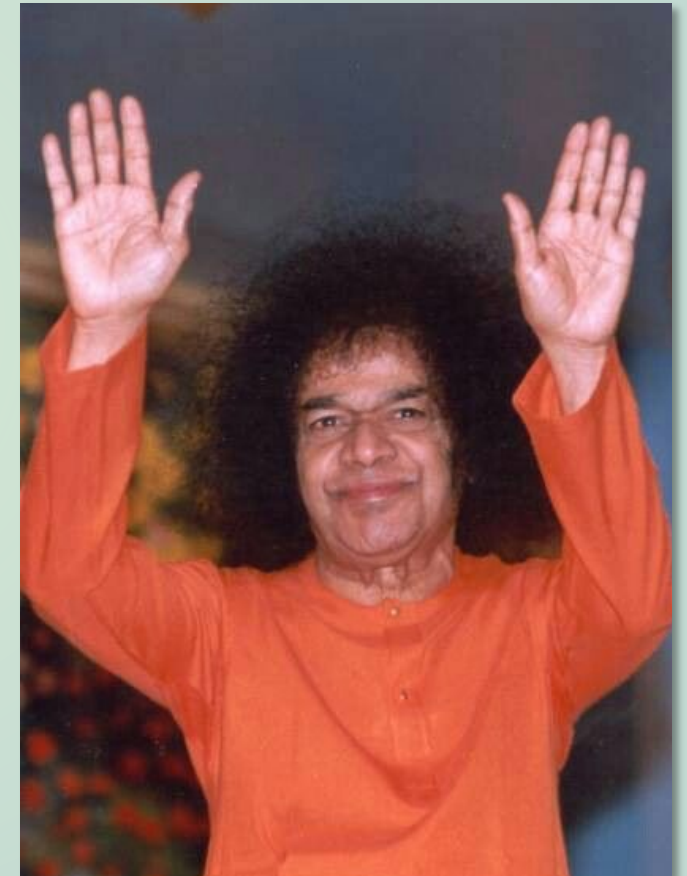
※9ラーヴァナ：『ラーマーヤナ』に出てくるランカーの羅刹（悪鬼）の王。

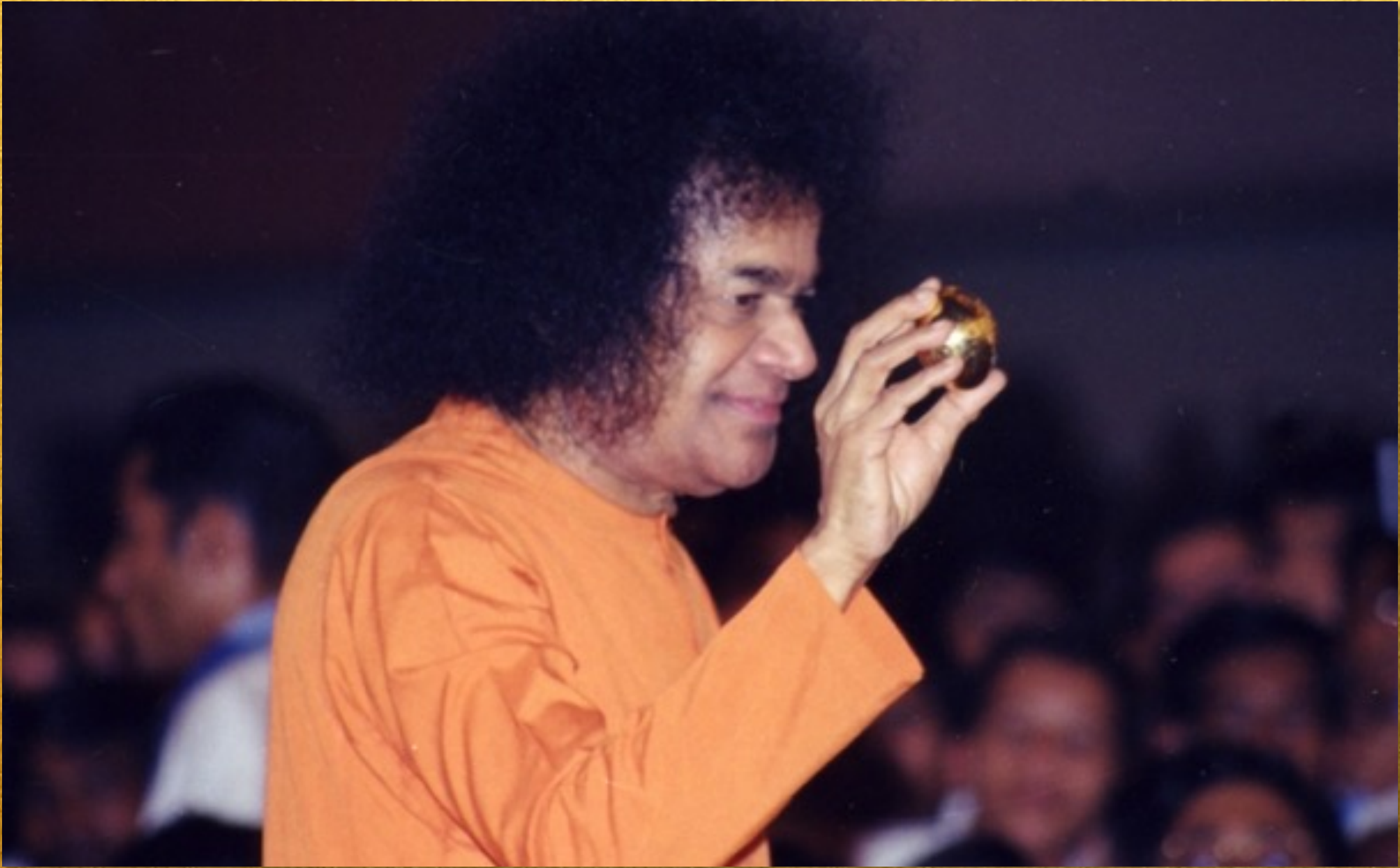
※10プージャー：礼拝、礼拝供養、供物を直接神の像に捧げて礼拝する儀式、花や果物その他の食べ物を捧げて神像や肖像画の神を招き寄せ、特定のマン트라を唱え特定の身振りをしながら神をこの上ない客人としてもてなし神の機嫌をとる。儀式礼拝、詩を吟唱したり歌を歌いながら一定の時間に行う

あらたまった礼拝、供養、崇拜、尊敬、奉献（尊敬をもってもてなすことが原意）、何らかのものを供えて神々に礼拝すること。プージャーは家長の大切な務めとされる。

※11シヴァ神：破壊を司る神。

※12ブリンダーヴァン：ババの別荘と大学があるホワイトフィールドの別称。





Jai Sai Ram